

English title:

Philosophical Essays
by Raya Dunayevskaya

* Marxist-Humanism Today

* The Theory of Alienation: Marx's Debt to Hegel

* The Afro-Asian Revolutions

Japanese edition, 1967

レーヤ・ドナエフスカヤ 論文集

アジア・アフリカ革命

今日におけるマルクスの人間主義

アジア・アフリカ革命

はじめに

アジア・アフリカ革命

附録1 新しい人間主義

附録2 アフリカとアジア

附録3 人間主義

今日におけるマルクスの人間主義

後附の理論

おわりに

前進社 学習資料 2

3754

訳者まえがき

この論文は、もとと一九六一年四月、ラーヤ女史がデトロイトで執筆し、(発表された機関は不明だが)何らかの形で彼女を中心として組織された「マルクス主義的人間主義者」のグループの出版物に発表され、それとややおくれた同年五月、イギリスのケンブリッジ大学の新左翼にそくする学生たちのグループである「ユニヴァーシティ・レーバー・クラブ」の手によつてパンフレットの形で再刊された。私たちのほん訳はケンブリッジのグループによつてなされたパンフレットを定本としている。なお、このテキストには、附録二として、「まえがき」の執筆者ビーター・カトガンによる、ラーヤの著「マルクス主義と自由」に関する書評がのせられているが、私たちはこれを受容して、そのかわりに、彼女の発議にもとづいて、アフリカ人によつてなされている季刊誌「現代のアフリカ」の一九六三年の第四・四半期号に

イギリス版のまえがき

政治は創造的な活動であり、ひとが彼自身の自由を拡大する手段でありうることは、たえず忘れざられている真理である。一九六一年には、はくたちはようやく、古い世界が崩壊して混沌とした状態かつづいていた一九一四年に入りこんだ政治的な荒廃から立ち上ろうとしている。十月革命の勇敢で輝かしい新世界建設の試みは、一九二三年には不幸な結果におわつた。人間は、世界戦争いかいにはムソソリーニとヒトラーにたいしてあたえるべき何の答も見出さなかつた。第一次大戦と第二次大戦の中間の全世代は、彼ら自身にあたえられた課題を理解することができなかった。自ら「共産党」と称した政党は、教条とテロルの上に尻をすえていたし、自ら「社会党」と称した政党は、指導者たちのチツボケな野

のせられた、女史の「アフリカとアフリカのマルクス主義的人間主義」と題する論文をのせることにした。

心の上につかっていた。政治は汚れた言葉になつた。だが、一九四五年には、一九一八年当時よりも社共両党にたいする幻想は少なくなつていた。そして、一九五三年から五六年までの時期——つまりフォルクタルベルリンやボズネンにおける蜂起や、ソ連共産党第二〇回大会やハンガリー革命や、スエズ事件のおこつた時期にたいは、そうした幻想のうちでのごされたものは数多くはなかつた。そして、スエズ事件のうちに、アフリカがたち上つた。ついで、イギリスから日本にいたる人民は、原水爆反対の運動を開始したのだ。

原則で、最初にはハッキリした形をとらず、指導者を以て自任する人たちにたいしても何らの尊敬を払うことのない広汎な討論が、旧来の組織を一掃し、新しい組織をよびおこした。この討論は、数々の成果をうんだが、このパンフレットはそうした成果のひとつなのだ。

モスクワ裁判の時期の間レオン・トロツキーの秘書をつとめていたライヤ・ドナエフスカヤは、一九三九年のヒトラー・スターリン協定に関する意見の相違によつてトロツキーと決別し、ソ連の性格についての綿密な再検討をはじめた。そして一九四一年には、彼女は、世界の目撃しつつあるものは、資本主義の過程が一切の資本を「ただ一人の資本家でないだ一つの資本家社会の手に」「向取図「資本論」(四一九頁)ひきわたす結果に終るだらうというマルクスの予言が真実だ、という結論に到達していた。彼女は、このことかすずにソ連でおこつて

いたことを知つた。所有財産そのものは、資本主義的である点では私有財産とちつともちがわなかつた。五十年計画下の雇用者と被雇用者との間の関係は、本質的には、他のどの資本主義下のそれとも、本質的には全く同じだつた。ついで彼女は、「アメリカの扶勢を研究したのち——新型の資本主義は、ソ連に特有のものではなく、世界資本主義の発展の新しい段階以外のなにものをも意味しないと結論した。国家資本主義はすでに成功していたが、あるいは全世界にわたつて独占資本主義のあとをうけつこうとしていた。

こうした基本的な理論の助けをかりて、(事実そうであるように、まったく普通の人間がもつていて、彼自身の運命を決定する能力についての基本的な信念をもふくめて)、ドナエフスカヤは、マルクスとレーニンの人間主義の再発見をふくめた、新しい社会主義の理念の組合体を作り上げた。こうした彼女の理念は、それらしいこのパンフレットや、彼女の著書「マルクス主義と自由」「邦訳「海外と革命」」やデトロイトで発行されている月刊紙「ニューズ・アンド・レターズ」のなかにひきつづいてのべられてきた。

イギリスでは、労働党は一九五九年秋の総選挙で壊滅的な敗北を喫した。こんなふうに組織された政治運動が、こんなにもみじめな結果をうみだしたことはいまだかつてなかつた！も一度あらためて考え直すことが、これまでのいかなる時よりも一層必要なことはあきらかだ。

ケンブリッジでは、ユニヴァーシティ・レーバー・クラブにそくする一群の左翼学生たちが、以前よりも一そう深く、運動のなかで一体何が間違つていたかを研究し、レーバー・クラブの批判的な雰囲気の中で、さらに彼らの機関誌「ケンブリッジ・フオアワード」のなかで、彼らの結論をテストするために非公式な集りを持ちはじめた。このパンフレットの出版は、そうした活動の成果のひとつ——つまり、いわば出版活動における左翼グループの洗礼式なのだ。そしてわれわれは、それが新しい社会主義的国際主義にたいする意味ぶかい貢献であることを認めている。

ピーター・カドガン

一九六一年五月一日

-5-

ナショナリズム・共産主義・マルクス主義的
人間主義ならびに

アジア・アフリカ革命

ラーヤ・ドナエフスカヤ

三浦正夫訳

-4-

3757

はじめに

アフリカの現勢と世界の政治

一九六〇年は、アフリカの一九に上る民族がイギリスとフランスからの解放を達成した年であり、ベルギーがコンゴにたいして、経済上ならびに政治上ではこの国をその手の中にかくく握りつづけたから形式上の政治的独立だけはひとめもいと考えた年だった。資源の豊富なカタンガ州では、コンゴ人民は、白人の帝国主義が黒人の傀儡政府を通じて詰すことかであるという新しい事実と直面した。コンゴ共和国の連日三日にして、モイズ・チオンベはカタンガ州の「独立」を宣言し、パトリック・ルンバ大統領は連日の援助を要請した。こうした連日の介入の根本には、核戦力を保有する二大巨人——ソ連とアメリカの間の競争の新しい形態がひそんでいたのである。

国連総会でのフルシチョフの演説は、ソ連が連日のコンゴへの介入に賛成投票をしたという事実を世界の人民に忘れさせることをねらったものだ。抗議のために、靴をぬぎそれでテーブルをガングランたたくことによつて、彼は、それより先ず、連日の派道を承認していたにもかかわらず、世界中の人民の眼前で、コンゴにたいするソ連の政策と連日の政策とを分離したのだ。ルンバの側につくことによつて、彼はアフリカとアジアの人民の心をとりえるための闘いに従事した。なぜなら、種族の絆をこえて、真に民族的な独立運動を樹立してきたのはルンバだったからだ。

ルンバは連日の援助を要請していたが、それは、彼が独立を維持するためにはソ連とアメリカの双方を利用できると考えたからだ。だが、この双方を利用することができるとは、彼の方がさきに利用されてしまった。ルンバが殺害されたのは、彼の指導するコンゴ民族運動に反対するベルギー帝国主義とそのアフリカ人の傀儡たちの動きをアメリカ帝国主義者が黙認した事実から生れた避けることのできぬ結果だった。ケネディ大統領と連日大使が流したワニの涙は、フルシチョフが、アントンヌ・ギゼンガ政府を承認しこれを支持することによつてコンゴへの足場をつくるために、ルンバの殺害を利用しようと思案していることがあきらかになるやいなや、大いそぎでぬぐいさられた。

国連、つまりアメリカのコンゴ（ならびにその親戚す

るウリニウムやコバルトやチタニウム）支配にたいするソ連のこうした挑戦は、たまたまアフリカによつて反戦されることになった。ソ連は後退し、その連日大使がアレクサン・ゾーリンは、セイロンやアラブ連合共和国やリベリアが提案した、「内戦を停止させるために軍隊を使用する」制限を連日にあたえるべしという決議にたいしては拒否権行使するなどの訓令をうけた。

国連がコンゴの内戦を停止することができるとかどうかは、疑わしい。だが、国連が、アメリカとソ連の間の世界的な権力獲得競争を停止できないことは確実だ。分割の脅威はいま悲劇的なコンゴ全土を襲っている。これまでもすでに、二つのドイツ、二つの朝鮮、二つのグエトナムがあつたが、いまや二つのコンゴが生じねばならぬのだろうか？

一九六〇年は、アフリカの解放闘争の転換点だった。たとえば、人種的差別制度をとっている南ア共和国のように、アフリカ人たちが敗北を喫したところをさへ、彼らは徹底的となつていた通行証を大衆的に焼き払い、「イズウェ・レツウ」（「わが祖国」）を勇放に高唱することによつて、全世界の人々に電撃をあてた。すでに政治的解放を要請していたガナやギニアでは、彼らは経済的独立のための闘いに直面しはじめた。カメルーン、中央アフリカ共和国、チャド、コンゴ共和国（ひとつは旧ベルギー領、いまひとつは旧フランス領）、デホメ、ガボン、モリタニア、回教共和国、象牙海岸、マラ

カシイ（旧マダガスカル）、マリ（旧フランス領プーデ）、ニジェール、ナイジェリア、セネガル、ソマリランド、ならびにオートボータ共和国——以上の一七に上る新興独立国がアフリカに生じたのだ。

すでにこの年の終りには、ポルトガル領アフリカにおける「静かな」独裁的なテロルの支配する地域をもよくむ白人至上主義者の支配下にある大陸の最も暗黒な片隅にも光が投げられていた。ロイ・ウエレンスキー卿連盟は、北ローデシア（一九六四年に独立してザンビアとなつた）では、ケネス・カウンダの周囲に結成された統一民族独立党からの猛烈な挑戦をうけ、ニアサランド（同じく一九六四年に独立してマラウイとなつた）では、バンダ博士を擁するマラウイ会議党からの猛烈な挑戦をうけた。

ロイ・ウエレンスキー卿の「多数人種主義」がフェルワート（南アフリカ共和国首相で猛烈な人種差別主義者）の「フアンスト」的なアパルトヘイト（南ア共和国の人種差別制度のこと）政策の別名にすぎないことは余りにもハッキリしているけれど、ケニアと南北ローデシアの白人自由主義者たちは、一体なぜ「多数人種主義的な」政党よりも民族主義的な政党がアフリカにおける解放の手段として利用されねばならぬのだろうかという問をだしている。ローリン・モリス卿がだしたこうした質問にたいして、ケネス・カウンダはつぎのように答えた。

「おなたが、私たちが望んでやまぬ独立をすでに達成

-R-

した、アメリカの諸民族をこらになれ、どの場合にも解決をもたらしたのには民族主義的な運動だつたといふことを発見されるでしょう。多数人種主義的な政党は、いまだかつて、アフリカ人のために独立を獲得したことはありませんでした。

私たちは、たんにアフリカ人の権利だけに関心をもつものではありません。私たちは、人間の権利のために、つまり一切の人間の解放することのできる権利のために闘っているのです。私たちは、どんな形をとるにせよ、一切の帝国主義や植民地主義に反対する闘争に従事しています。そうした帝国主義や植民地主義の代理人が日本からではなく、帝国主義や植民地主義は、よい側面よりもはるかに多くのわるい側面をもっているからです。私はここで、つぎのことをつけ加えねばなりません。それは、つまり、私たちの国家統制の問題にたいする唯一の有効な解答は、イギリス政府が少数者のグループから多数者のグループ、すなわちアフリカ人へ丁重に権力を譲渡することだと、私が信じていることなのです。アフリカ人たちが感ずる幸福は、彼らにかつての不幸を忘れさせ、過去を過去として弾き飛ばすこと、こうして北ローデシアには、どんな人種をも迫害することなく、一切の住民の幸福に奉仕する、黒人の支配する新しい国家が生れるだろうと、私はほとんど確信しています。なぜなら、多数者が少数者のグループをおそれることはナツトもないからです（「黒人の政府」ケネス・カウナンド）

に要をあらわしたのだ。

解放の運動は、ほかの植民地の壁にもあらわれている（「中絶デニール五章五節にみえるたとえ話に由来する。不吉の暗示のこと」）。一九六一年にはすでにタンガニカが独立国の列に加わつた事実がみとめられる。そして、ケニアのように反革命的な白人の植民者たちがあつて、いるところでも、解放のために闘いつつある人々が、独立の延期をみとめようとは決して考へていないことはあきらかだ。自由の鐘は西部と東部を問わず、南部と北部を問わず、アフリカの全大陸にたからにうちならされたのだ。

一九五〇年代への一瞥

アフリカ人たちが自由にむかつて前進するにつれて、ソ連の指導者たちは、たえず、彼ら自身によつてとくに曲解されたマルクス主義を利用しようとして身構えている。今日の共産主義がマルクスのいだった理念に真正面から対立していることは、共産主義者たちがハンガリーの革命を野蛮に弾圧したことによつてあきらかにされた。一九六〇年の夏ソ連が国連で行つた演説は、一九六〇年の一月にモスクワに集つた八十一上る共産党によつて、「独立した民族民主国家」（「共産党・労働者党代表者会議の声明」、石堂編「現代革命と反独立闘争」三五五頁）に関する理論にホンヤクされた。ソ連

とコーリン・モリスの間に行われた討論）。

アフリカ人民の偉大な創造的活動の発展によつて、わずかに一〇年という短期間のあいだにアフリカの地図はスツカリかきかえられ、したがつて、世界の地図もかきかえられた。こうした運動がまだアジアや中東の革命によつておおいにうきうきしていた初期の頃でも、人類が、世界史の発展のなかで全く新しい、より高い段階に到達したといふことはあきらかだ。

アフリカ人民の解放運動が第二次大戦中、まずフランス領マダガスカルに、ついで戦後イギリス領ケニアに勃発したとき、それはおそろしく暴力の大狂宴に演進した。だが、イギリス帝国主義は、マウ・マウの経験によつてつぎのような教訓をさすけられた。つまり、今後の独立闘争は、経済上の特権だけは留保するという望みをいだいて、丁重に処理せねばならぬという教訓を。

ドゴールのフランスは、アルジェリアにおいて回教徒の革命家たちとの間に開かれた、遠々とつづいた新鋭な戦争からは何ごとをも学びとらなかつたけれど、ナツボクナギニアの勇敢な「ノー」というあたりにこたます呼びかけから、フランスは、サハラ以南のアフリカにある以前の植民地では、やり方をかえるべきだといふことを学んでいた。それはいらい、解放の上げ潮は、旧来のイギリス、フランスならびにベルギーの帝国主義を波間にまきこみ、二年という短期間のうちにさきに列挙した諸国にガーナとギニアを加えた一九一上る独立国がアフリカ

が、少くともアフリカでは、自由を獲得しているといふようにする人々には、五〇年代の記録をより詳しくしらべてみればいだらう。

一九五三年から五四年にかけた頃までは、ソ連の指導者たちはアフリカについてはほとんど関心を示さず、クワメ・エンクルマを「イギリス帝国主義の代役をつとめる民族主義者」と名づけていた。これは以前にインドのネルのたつておかれたレッテルだつたのだ。ソ連の共産主義者は、その他に共産主義者がいないという理由があれば、アフリカ側にもソ連側にもつかない、非共産主義の世界にたいしては、これを疑念の目を以てながめていた。とくにアフリカではそうだつた。アフリカには、共産主義者がいないばかりでなく、一しよに「人民戦線」を結成すべき相手もいなかった。しつかりしたプロレタリアートもないければ、めだつた土着のアフリカ人ブルジョアジイもいなかった。解放運動を指導していた中間階級の知識人たちは、モスクワではなく「西側」で教育を受けていた。たとえこうした人々が夢をいだいていたとしても、そして彼らは共産主義をいだいていたのだ、それはソ連共産主義の夢ではなく、汎アフリカ主義の夢だつた。独立をかちとつた最初の国ガーナの例からみられるように、当分の間は、指導部はソ連よりもイギリスにより一そう接近していたのだ。

ブルジョアは、新しい世界がたち上つてくるのを見たが、この世界は何ひとつソ連の世話になつてはいなか

つたし、ソ連の歩んだ途につづこうという傾向を示さなかつた。彼は、この新しい世界を失つてならないものならは、この世界に介入せねばならなかつた。だから、同連での演出が行われ、八一九年の共産党の宣言が「独立した民族民主国家」にいわゆる純粋な支持をあたえることになつたのだ。

一九五六年に、フルシチョフは、はじめて、帝国主義戦争は「不可避ではない」と宣言した。彼がソ連共産党第二〇回大会の席上でやつた有名なスターリン主義反対の演説によつて、スターリニストたる彼は、今後「マルクス・レーニン主義」の汚れたきぬのもとに前進することをめとめられたのだ。こうして、彼は、自分自身の汗と血によつて西歐帝国主義からの独立をすでに勝ちとつていた国々の面前に、解放の理論の唱導者として立ちあらわれることができたのだ。

非スターリン化は、ソ連の方針転換の第一歩だつた。だが、一九五〇年代のフルシチョフに自信と過信をいだかせたものは、スプートニクだつた。スターリンは、もし彼が中立国を完全に支配することができない場合には、これらの中立国にたいして管治の目をひからせていたのだ。フルシチョフは中立国を離れようとしたとき、彼らにたいして、きみたちは独立の途をすすむことができると告げた。新しい宣言はつぎのように説明した。「人類の生活のなかに新しい歴史の時期がはじまつた。すなわち解放を勝ちとつたアジア、アフリカならびにラテン

アメリカの諸国民が国際政治のなかで積極的な役割を演じはじめた」(前掲書三五二頁)と。もしここにいわゆる「国際政治」なるものが共産主義の政治であることに疑をいだくものがあるとするならば、彼はこの宣言をよませようではないか!

戦争は「決して宿命的に不可避的なものではない」という、フルシチョフがアフリカ・アジアならびにラテンアメリカの世界にあたえつつある「国際政治」に関する教訓は、スプートニクとECMをもつソ連が、その政策をなんらかの方法で西側の政策に従属させていることを意味するものではない。反対に、ソ連は「平和共存」のチャンピオンなのだ。なぜなら、「決して宿命的に不可避的なものではない」戦争とは、西側が、小規模な戦争が核戦争による大崩壊をひきおこさないようにと渾水をふんで歩きつつけることを意味するからだ。だから、「独立した民族民主主義国家」ははるかに大胆にアメリカに挑戦してよろしい。ソ連は、彼らを援助するために全力をつくすだろう。要するに、「平和共存」とは、コングからキューバにいたるまで周到な注意を払いながら一切の危機を醸成することだ。

アメリカとソ連という、たがいに闘いつつある国家資本主義の両極の間で身をひきまかれることをさけるために、アメリカの大衆は、ロシア人であると、西歐人であると、アメリカ人であるとを問わず、技術的に進歩した諸国の労働者の方に直接むかわねばならぬ。こうした諸

論の動向にそう考へるときは、精神的労働と肉体的労働とを分けておいて、オーストリア・ドイツに反対するアメリカやヨーロッパの労働者の闘争のことが顧みられなければならない。

最後の勝利をかちえたモンテネグロ市のバス・ボイコット闘争(一九五五年一月から約一年にわたつて五万の黒人市民によつて行われたがバスの人種的差別反対闘争のこと)にしろ、とくに坐り込み闘争(一九六〇年の人種差別反対闘争のこと)にしろ、アメリカにおける黒人の自己活動は、アフリカ革命のための力の貯蔵所なのだ。黒人は決して皮膚の色の問題としてアフリカ革命に共鳴しているのではない。彼は、彼の日常生活のなかで、現存する社会との闘争のなかで革命的なものであり、したがつて彼はアフリカ革命の意味をシカに深くみとめているのだ。そして、アメリカの生活のなかで黒人がユニークな立場にたつていゝために、黒人はアメリカ労働者階級全体にたいする刺激となつてゐる。

シャープビルの虐殺(一九六〇年に南ア共和国のシャープビルで、通行証制度その他の人種差別制度に反対する黒人のデモにたいして政府が加えた大弾圧によつて数百に上る黒人男女が虐殺された事件のこと)に反対してロンドンで開催された大衆的デモンストレーションのなかで、「南アフリカ連邦製商品のボイコット」運動のなかで、イギリスの民衆は、アフリカの地で解放のために

闘つてゐるすべての人々にたいしてのよい親近感を示した。こうした親近感に決してたんなる同情の表明にはとどまらない。それはもともと資本主義に反対する日常の闘争に固有のものなのだ。

技術的に進歩した国の労働者の大多数の援助がなくては、アフリカの革命もアジアの革命も、資本主義的な搾取や官僚主義的な国家計画の担当者たちの手からのがれることはできない。

一九五九年の六月に、私ははじめてアフリカの革命を分析したとき、私は、「こうした偉大な覚醒は、十字路に永久にたちつづける運命にある、旅路の中途の宿屋にとじこめられることになつてゐる」のかどうかとたづね、「こうした偉大な覚醒は、……国家資本の両極のうちのひとつつまりソ連かアメリカのいずれかをえらばねばならないのだろうか」とたづねた。

このパンフレットの第一版のなかで、当時わたしがこの問いにたいしてあたえた答は、わたしにとつては二年間と同様に今日でも有効であるように思われる。

一九六一年四月

アメリカ、ミシガン州デトロイトにて

ラーヤ・ドナエフスカヤ

アフリカ・アジア革命

一九六〇年の独立にあたって、およそ三五〇〇万の人口を擁している西アフリカ最大の国ナイジェリアは、あらためて、独立とは新しい国のことを意味するのか、それとも帝国主義的な搾取が地理的な理由に種族的に分割されている国土のなかでひきつづいて行われるかもしれぬ場所を意味するのか、といった間に直面した。

ナイジェリアは、双方ともに同様に十分な準備をととのえて、解放運動を国家資本の両面につまみこんでアメリカのいすれかにしほりつけようとしてこころみている。共産主義と道徳的武装のうちのいすれをえらばねばならなかったのだろうか？

汎アフリカ主義

汎アフリカ主義とははる新しい型のナショナリズム

をかぶった搾取から自由への道の途上にある。「即興アフリカ人のためのアフリカ」という要求は、たとえそうした交換がはじめにどんなに苦しいものであっても白い顔をかぶった抑圧を黒い顔をかぶった抑圧と交換することではなく、運命を自己自身の手中ににぎることを意味する。

他方で、理論としての汎アフリカ主義とは、エチオピアのような王国や、リベリアのような土着の黒人経営者を擁するアメリカ帝国主義の附随地点をもくむアフリカ合衆国という目標のことを意味する。運動の指導にのりだした指導者たちの間では、そして彼らのうち以前マルクス主義者だった者も二、三にはとどまらないが、新しい国民の運命という問題は、行政と権力の問題に帰着させられた。こうして権力を手に入れたのちはいよいよ、彼らはその権力にふさわしいイデオロギーを探索するだろう。

かつて四分の一世紀の間コンメンテルンの位階制のなかにいて、その後漸くこれと訣別した西インドの作家、故ジョージ・バッドモアの例から私たちがしるるように、右のようなやり方の中には、たしかに自由を求める偉大な昂揚は具体化されてはなかった。彼バッドモアのコンメンテルンからの訣別は、本質的な問題にもとづくものではなく、むしろ権威の問題にかかわるものだった。彼の共産主義的な一つまりは国家資本主義的な心理は、以前よりも一そう深く彼の心に根をおろすことになった。

をめざす理論的な出発点とは、W・E・B・デューボア博士によつて展開された哲学だと思われるだろう。ちなみに、デューボア博士とはすぐれたアメリカの歴史家で、一九〇七年にはアメリカの黒人のための完全な権利を獲得することを目的としたナイヤガラ運動の創立者だった（彼はナイヤガラ運動の挫折後、一九一〇年には全国有色人向上協会に参加し、やがてその改良主義的政策に反対して一九三四年にこれを脱退し、第二次大戦後共産党に入党、昨年逝去した）。

不幸にして、デューボアがいたっていたアメリカの黒人の進歩に関する考えがたえず「才能ある十分の一」という考え（アメリカの黒人解放を黒人中の少数のインテリのエリート階級の指導に期待するという考え）を土台にしていたのと全く同様に、彼がいたっていた汎アフリカ主義の哲学も帝国主義の制度の中で働いている「才能ある十分の一」もしくは「思考するインテリゲンチヤ」といった、さきの考えを一對をなす考えを土台にしていた。一九一九年に行つた彼の最初の声明のなかには、つぎのような文章がよまれる。思考するインテリゲンチヤを通じて、黒人種は、国際連盟の傘下に、黒人問題研究所が設立されることを要求する。

ところが、第二次大戦とともに情勢は一変した。こんどは、数百万に上るアフリカの黒人大衆が解放を要求しつづけたし、現にこれを要求しつづける。彼らは、数世紀にわたる帝国主義的な搾取——つまり、たえず白い顔

アフリカ人民も国家権力を獲得しつづけたからだ。ソ連は、彼にとつて、依然として仰ぎみるべき国家権力だった。彼はたんにソ連の国家権力から訣別しなかつたばかりではない。彼は、イギリスやドゴールのフランスやアメリカのそれをもくめて、彼が「利用」できるかもしれぬと考えた一切の国家権力から訣別することはできなかった。

同時に、バッドモアは、エンクルマ大統領の「アフリカ問題に関する顧問」としてアフリカで最初の独立国、ガーナにくつづいた。彼は、ガーナにくつづいた。彼は、ガーナとエンクルマとを「行動する汎アフリカ主義」となづけた。

やがてエンクルマは、汎アフリカ主義にガンジの「非暴力主義」とアジアの「中立主義」とを接木した。一人の熱狂的なエンクルマの批評者がいつたように「革命史上の注目すべきエピソードのひとつのなかで、彼（エンクルマ）は、独立で、マルクスとレーニンとガンジの理念にもとづく権威の大綱をかけた……」(二)。ともあれ、こうした汎アフリカ主義を採用することは、アフリカにおける解放運動の水路をひらき、この運動を世界国家資本主義の秩序の内部にとじこめる目的に務仕するものだった。

こういつたからといって私は決して万事がそんな状態のままにとまらうとしていてると思えてゐるのではない。自由にむかう偉大な昂揚はそうたやすく抑圧されるもの

ではない。現代の植民地革命は、極東と中東とアフリカにおよそ二に上る新国家を生誕させた。こうした歴史的な波は、決して西アフリカでも過渡をかえはしなかつた。まして、東アフリカや北アフリカやサハラ・ヘイト（南ア共和国で行われている黒人にたいする人種差別制度）の支配下にある南アフリカでは決してそんなことはなかつた。たとえ、私たちがしばらく話を西アフリカにかぎつてみても、工業化の問題を解決する道は決して資本主義にそつてすすむ一本道だけではない。

世界資本の二大勢力がどんなに強力であらうとも、新興国は、ひとたび彼らが、技術的に進歩した諸国の政府にたよることをはなれて大衆に依頼する方にむかうならば、歴史の十字路に永久にたちつづける運命にある。旅路の中途の宿屋にとじこめられることをやめるだろう。このことは、たんなる希望のなげきでもなければ、全然海図のない海に漂う問題でもない。

朝鮮戦争はアメリカの歴史で最も人気がない戦争だつたが、一方アルゼンチン戦争は、アルゼンチンと隣国に派遣されたフランスの青年の一部の間に突然に暴動を生じさせた。現在の列強は、こうした後援をよみがえはしなかつた。彼らは、アジアならびにアフリカ革命から手をひくように告げられていることを知っている。

他方で、古い急進主義者たちは「同情」をしめし、資本主義的な工業化の道いかにアフリカやアジアにとつてひらかれた道はないのだという彼らの信念を示す、

ハワリーに投獄したという事実は、平和の問題が、ほかのどんな問題よりもつよく労働者の心中を支配していることの十分な証拠なのだ。投票でトルーマン政府を退任することによつて、労働者は同時に新しい政府の任期をも制限した。

朝鮮戦争はアメリカ史上最も人気がない戦争だつたという発言は、たんに、中国の共産主義者によつて若干のアメリカの軍人にとこされた洗脳に関連するものではなかつた。（フオーバース知事（アーカンソー州知事で人種差別主義者の巨頭）とリトル・ロック事件（一九五七年九月、アーカンソー州リトル・ロックで行われた、黒人学童の共学制導入に反対する白人暴徒の暴動事件）がある）は、共産主義者による洗脳は容易であらう。だが、洗脳について最も注目すべき事実は、この言葉が工場労働者によつて、経営者や労働組合の指導者による「おしわけ」のことを指すために、きわめて急速に用いられるようになったことだ。

私たちの時代は、まさしく、人間の精神のための闘争の時代として特徴づけられてきた。そして、こうした闘争は、まさに開始されたばかりなのだ。

私たちは「はるか昔」で、安全で健全で無関心でいるけれど、アフリカとアジアの革命は、決して二つの大洋と七つの海と巨大な大陸とをこえた「はるか昔」で行われているのではない。それは空中から落ちたれさがつていく戦争であるばかりではない。「後進」諸国に

もの分りのいい顔をして、こうした革命を否定する傾向にあるようにみえる。彼らが心理的に新しい時代にすすむことができないのは、過去の理論や現在の事実を抵抗しているからだ。

世界の対極では

地理上でも産業上でも、さらにたんに権力の点ばかりでなく、進歩した、だが非政治的だといわれている労働者に関しても、アメリカはアフリカの対極にたつていように見える。

ヨーロッパの知識人にとつてはかりでなく、ヨーロッパの労働者にとつても、アメリカの労働者階級はひとつの神秘のように見える。ヨーロッパの知識人や労働者たちは、アメリカの労働者が産業上の闘争のなかで示す闘争精神は十分にみとめていた。だが、アメリカの労働者が労働者階級をつくつていないので、彼らは非政治的であるように見えるのだ。だが、アメリカの労働者が資本主義にたいする反対の気持をヨーロッパの労働者とはちがつた風に表明していることは事実だが、彼らが非政治的だとかヨーロッパの兄弟よりも反動的でないとかいふことは真実ではない。

景気が低迷し、人民の心なかで共和党が恐慌と同一視されているにもかかわらず、数千万に上る人々が、朝鮮戦争を終らせることを約束したという理由でアイゼン

世界資本主義の新しい段階——国家資本主義

第二次大戦が終わつたのは、世界の覇権をうかがう二つの新しい競争者——連合とアメリカとが、こしはらうの間は十分なものをもつていたからにすぎないことはあきらかだ。あたかも、平和とは戦争と戦争との不安定な中間にすぎないことを証明するもののように、彼らはそ

の全進路にそつて二つのドイツ、二つの中国、二つのグ
エトナムという里程を歩いた。

ロシア人たちは、東ドイツから満州にかけて目によれ
る一切のものを掠奪しはじめたが、ただひとつの富める
勝利者アメリカは、華よりむしろおとろえねはならぬと
感じた。アメリカは、敏速に、西歐をプロレタリア革命
による直接の襲撃から「救いだす」ためにマシーナル・
プランに着手した。

アメリカは、当時「勝利した同盟国」(イギリスとフ
ランス)の植民地帝国に終止符をうちつつあつた植民地
革命の上げ潮をくいとめることはできなかった。極東や
中東や地中海沿岸地域やアフリカといったところが反乱
にわたつていた。だから、アメリカは、同時に低開発
諸国への援助のためのポイント・フォア計画(一九四九
年に当時のアメリカ大統領トルーマンが宣言した低開発
諸国への大規模な援助計画)に着手しなければならな
かつたのだ。ソ連もまた、もし世界を支配するための競争
をつづけようと思ふならば、彼ら自身の「低開発諸国に
たいする援助」を開始する方がいいたるうと見てとつ
た。

一方ではソ連、他方ではアメリカに課せられた問題は
現在のように発展と衰退の段階ですすんだ資本主義が
「過剰生産」や「余剰資本」によつてではなく、投下さ
れた資本量に比べた利潤率の低下によつてくろしんでい
るとき、低開発諸国にあたるべき資本をどこで手に入
る。

れるかという問題なのだ。一言でいうならば、たえず増
大をつづけるために必要な資本の総量はひどく不十分な
のだ。一体どうしてこんな事態が生じたのだろうか？

私たちは、「純粋に経済的な」観点からみてさえも、
資本主義の崩壊に関するマルクスの予見が理論から生活
にまで移つてきた時代に生きている。一九五〇年代の一
〇年間は、せまい資本主義的な条件のなかでの資本の問
題を生きて生きたと強調している。一方、これと同時に、こ
の二〇年間は、たとえ(労働者の)「一日に二回二四時
間が、ことごとく資本によつて領有され得る」としても
資本主義は崩壊するだろうという、マルクスの極端な仮
定をおさらかにしている。

マルクスの主張は、剰余価値は生きた労働からしか生
じないから、資本主義制度は崩壊するだろうという点だ
つた。しかも、こうした労働の搾取にもとづく、資本主
義の発展の矛盾は、資本主義が生きた労働をま
すます少く、無様をますます多く使用することだ。ま
すまた大量の死んだ労働を動かすためにますます少量の生
きた労働が必要としないという矛盾は、同時に大量の
失業率と利潤率の低下をつくりだす。

帝国主義の最盛期には、アフリカの分割や東洋の植民
地化からひきたされた超過利潤は、マルクスの予言と矛
盾するようにみえた。そこで、たんにブルジョア経済学
者ばかりでなくローザ・ルクセンブルグのようなマルク
ス主義者たちでさえ、私たちが資本主義をほりくすた

めに利潤率の低下をまつのは、「月が暗える」のをまつ
ようなものだ、と叫びだした。

利潤の量がどんなに増大しようとも、不払労働時間の
搾取がどんなに重く労働者の背中に押しよるとも、真実
のところは、急速にじみた資本主義制度を、ますます増
大する規模で、全く同じ利潤獲得の動機をもつてうご
きつづけるにたりるほど十分な資本は生産されないとい
うことだ。ちょうど一九二九年の世界恐慌が先進諸国で
このことをあきらかにしたのと同様に、一九五〇年代の
アフリカとアジアの革命は、繁栄期においてすら、先進
諸国は低開発諸国の経済を進展させるにたりるほど十分
な資本をもつてはいないということをパロディした。生産
の動機となる力がひきつづき剰余価値(もしくは不払勞
働時間)を蓄積することであるかぎり、民間の工場のため
めであるうと国家の宇宙船のためであるうと、人間の労働
をまるまる二四時間強有するために支配階級がどんなに
努力しても、まだ「後進国」を工業化するにたりるだ
けの十分な資本をつくりだすことはできない。理論と事
実とは、たがいにかきわめて密接に接近してうごいてきた
ので、今日では、世界のどこかに余分の資本があると主
張する人を見出すことはむづかしいだろう。このことは、
インドや中国やアフリカやラテン・アメリカのような低
開発諸国の経済を見ればあきらかだ。西歐やアメリカや
ソ連でも、このことは同様にあきらかだ。故世紀にわた
る世界支配ののち、資本主義の理論的代弁者たちは、い

まや、世界の三分の二が暗えており、のこりの三分の一
は、ますます多くの労働者の労働を領有する方法を究明
することに忙しさをわめていることをみとめている。

本質的には、この点では、私的資本主義と国家資本主
義の間にはなんの相違もない。一九六一年にこのことは
ドラマティックに確証された。つまりこの年に、強力な
ソ連が、世界最初の宇宙飛行士ユーリ・ガガーリン少佐が
しげた地球を弾道飛行するというすばらしい事業の成
功にむいて彼に贈るためにみいだすことができた最大の
賞品が、彼と妻と二人の子供に、この時まで彼らが住
つていた二部屋のかわりに四部屋のアパートをあたる
ことだつたのだ。

資本主義の絶望的な袋小路をみて、「キリスト教的」
国際主義の理念を「西側」に売りこもうとのぞんでいる
若干の明敏なブルジョア経済学者がいる。彼らは、もし
こうした理念をその上にうちたてるべき、ある種の分割
支払計画を発見できるならば、それは資本家階級にとつ
て「重すぎる重荷」ではなく、同時に低開発諸地域の指
導者たちにとつても結構快適なものとなり、彼らは全体
主義的な共産主義、すなわち国家資本主義に反対して
「民主的資本主義」をえらぶだろうと信じている。

こうした明敏な経済学者の一人はパウル・ワード女
史なので、彼女はガガーリンの首相エンクラーマにえらばれて、
ガナ大学で「世界問題に関する連続講義」をこころみ
た。そこで彼女はつぎのようにのべた。「アメリカの対

外投資は、対外貸附が最も盛んだつた頃イギリスが行つたその辛じて五分の一にすぎない。今日の世界の悩みの種は資本の不足なので、たがいに競争している資本家たちの間に行われる、海外進出と投資のための競争では決してない。

それにもかかわらず、ワイド女史は、西歐諸国にむかつて投資と競争するように説得しようとして欲している。それゆえ、彼女は、資本が不足していることを知っているにもかかわらず、「持てる強國」がアフリカ人やアジア人に、「現在の段階で」彼らの経済が「吸収」できるものをあたえることができるという、彼女のテーゼの宣伝をやめてはいない。夾さい彼女は低開発諸国が必要とする資本の総量は「アメリカの国民所得のほんの1%にも当らない」と主張している。

滑稽な点は、「現在の段階で」という言葉のなかにある。彼女は、経済をして、一時期にほんのわずかな工業化しかさせないものは、まさに労働者の後進性だ——つまり「熟練労働者の不足こそが工業化をきびしく制限する要素だ」という点を強調している。資本の貸付あるいは贈与は、「四〇年ないし五〇年間」——少くとも半世紀を下らぬ期間にひきわたされることになる！ワイド女史がいそいでないことはあきらかだ。だが、自由を獲得しつつある人種はいそいでいる。

アジアとアフリカの人民は、(土地改革や身分制の解体はいうまでもなく) 彼らの経済の工業化を数世紀にわ

よく前進しようとする毛の中国の試みは、有色人種の新興国民に中国にたいして以前とはちがつた考えをいだかせた。

チベット人の反乱は、労働者群衆会を結成するにいたつたハンガリー革命の壮大さとは比較にならなかつた。またチベット人は官僚主義的な共産主義に直面して反乱をひきおこした最初の人々でもなかつた。フランス帝国主義反対の闘争にさいしては容赦なく闘いぬいたヴェトナムの農民たちは、すでに数年前にホー・チ・ミンから離れさつていたので、だが、その他の有色人種にとつては、当時はアジアの共産主義を再検討する機会はまだ熟していなかつた。だが、今日、アフリカは、工業化への中国の道に疑問を投げかけようとしている。

知識人の官僚と労働官僚

これらの民族解放運動が——そう発展することを妨げる最大の障害は、こうした解放運動を「指導する」ために姿をあらわした知識人の官僚制にゆらしている。これと同様な具合で、資本主義を克服しようとする労働者階級のすすむべき道に横たわる最大の障害は、彼らの闘争を指導する労働官僚にゆらしているのだ。

一九二九年の大恐慌が私有財産にもとく資本主義の破産を露呈してはいらい、たえず中間階級にぞくする知識人たちは、従来のように土着の中間階級と協力すること

たつてひきのばそうとは決して考えていない。有色人種の世界の人々に懐疑の念をもつて中国をながめさせているのは、まさにインドにおける経済近代化のこうしたのりペースなのだ。

外見上新しい工業化への道は、中国によつてきりひかれた。解放に関するマルクス主義の考えを勝手に奪いと、これを修正して腐敗した蒋介石政權を一掃する場合に利用することによつて、毛沢東の中国の、世界の有色人種にたいする牽引力はいちじるしくたかめられた。朝鮮戦争も第一次チベット占領も、新しい基礎の上に半封建的な政權を再組織するためにあらたに解放された創造的エネルギーと自由についての印象を植えはしなかつた。インドの工業化ののりペースとくらべるならば、ソ連型の計画をもつ中国は、イギリスの鉄鋼生産に挑戦しながら、まづしぐらに技術的に進歩した世界の中に突入したように思われた。

だが、どれほどの「大躍進」がなされようとも、それはすべて、大衆のへんまげられた背の上でなされたもので、決して大衆のためになされたものでなかつたことは、ただちにあきらかにされた。夜明けから日暮れにいたるまでの苦しい労働の結果として確立されつつあつたものは、決して新しい社会ではなく、国家資本主義的な全体主義だつた。中国共産党があえて「人民公社」と称したものの内部に、兵營の労働と、兵營の規律と、兵營の家族生活とを確立することによつて、ソ連よりもより

なく、たとえば蒋介石のように帝國主義と結びついている土着の私的資本家たちに反対して、農民を指導し統制するために都市をすてた。

農民を指導ないし誘導するために知識人たちが農村に下向してくるのはあるいはバリのカフエーのテーブルからかもしれないし、あるいはそのさいに最大の個人的な犠牲をともなうものかもしれない。だが、知識人が「自然に」(つまり彼が公然と支配階級として指命されたソ連の場合のように反革命を通じて) そうした地位につかないところでは、彼は、農村や工場で國家計画の代表者となるために、彼個人にとつて必要な一切の仕事を手をすつかり犠牲にしようとしているのだ。

現在のような國家資本主義の時代に、中間階級の知識人が、世界的な現象として、「個人主義」を「集團主義」にかえたことは、さげがたい事実なのだ。そしてこの知識人は「集團主義」という言葉で、固有財産や國家行政や國家計画のことを考へているのだ。

戦後数年にわたつて、こうした知識人の動きは、イスラエルの「社会主義的」労働組合(これは同時に最大の工場所有者だ)から、アラブ民族主義(この名前のもとでイスラエルと闘つた青年將校たちにはいたるまで、いたるところでさかんにひきおこされた。それは、いま、イラクでは、ナセルの民族主義に挑戦する土着型の共産主義的民族主義としてあらわれている。

後進国でも先進国でも、知識人の官僚は、プロレタリ

「われわれは、一九三一年から三四年までの時期にわが党によつて中ソブルジョアにたいしてとられた極左的な誤った政策——つまり、労働条件の低い水準の主張や、過度に高い所得税率や……生産の発展やわが国の経済の繁栄や労働者の方の公私の利益を考慮して考慮することをわれわれの目標にするかわりに、いわゆる「労働者の福祉」といつた近視眼的な一面的な見解を目標にすること——の再考を決してゆるしてはならない」と。

権力のための闘争は、土地の没収が決して高利貸的な税金の軽減以上を意味しないことを要求するかもしれないし、あるいはまた土地の没収がまづ「人民公社」につきすすむことを意味するかもしれない。だが、とにかくどんな場合にも、指導者は指導し、大衆は労働に従事する。そして、たとえば一九五八年の十二月の場合のように「行きすぎ」が停止されるときには、つぎのような「毛沢東思想」が支配するのだ。「ひとと一日に八時間はねむらねばならぬ。そして一日に十二時間以上働いてはならぬ」。

現代の国家資本主義時代には、工業化の過程が速かろうと遅かろうと、全体主義的な国家の支配者のいなく見れば、権力をにぎつていないとにかかわらず、知識人の官僚の低い階級まで浸透している。これが、なぜ

「社会主義は少数者すなわち党によつてもたらされることはできない」

マルクス主義がマルクスの時代にラッサーエルによつて代表された国家社会主義に反対しながら発展したようにレーニン時代のマルクス主義は、労働者の権力にたいするどんなにわずかな制限にたいしても、これと全面的に反対しながら発展を遂げた。

レーニンは、プロレタリア革命を特徴づけるものである。古い国家機関を粉砕するという原則は、決してプロレタリア革命を他の革命から区別するものではないとまで言明するにいたつた。「狂気になつたブチ・ブルジョアジイでも、それだけのことはしようとのぞむかもしれない」。

社会主義革命を他の革命から区別したものは、それが達成された方法——つまりそれが下から達成されたという

了革命に反対する労働官僚のかたい同盟者だ。彼の任務は、農民の反乱あるいはなんらかの人民の反乱を統制し、彼らの自己発展を阻止することだ。

こうした一切の知識人の原型的ない教師は、もちろんかつてマルクス主義的の革命家だつた。中国の支配者毛沢東だ。一九二五年から二七年にわたる中国革命のなかで毛沢東は農民のもつ革命の潜在力を発見した。大革命が都市で敗北したとき、毛は、農民の反乱は、それが中心都市なわち政府の所在地から非常にはなれていないために、継続することができると言うことを発見した。彼以前の一切の他のマルクス主義的の革命家たちが、革命が敗北したときやつたことと反対に、毛は監獄や亡命にむかわないで、ゲリラの戦士になるために広大な山嶽地帯に入りこんだ。

毛が、もはや彼につき従う大衆をもつていなかったにもかかわらず、新たにやつたこと——そしてこのことはたんに自衛行為のように思われたのだが——は彼につき従う農民たちを山賊たちをも排除しないで軍隊にかきこみこんだ。まるで督軍のように、彼は、蒋介石の無慈悲な攻撃によつて強制された、あの有名な六〇〇マイルに上る長征である、あるいは必需品を求めて行つたちよつとした村落への手入れである、とを問わず、この軍隊の訓練と行動を維持することに心をこめた。つきつて、第二の特徴は第一の特徴から生じた。つきつて大衆をもたず、指導者原理にしたがうようにゆがめられ

た原則をいだいて、党は、この当時からたえず権力にたよつていた。だが、権力は、実際には大衆運動なしには獲得されることはできない。そして、こうした大衆運動を確立するためには、原則が、解放の理論が、つまりマルクス主義が絶対に必要だつた。だが、毛は、どんなに原則一般にたいして忠誠をもちあうとも、特殊的には人民が毛に服従することを確信していた。

誰かがあえてマルクス主義の原則に言及するときには

彼らはいつもつぎのような粗野な答をうけつた。「マルクス主義はどんな病気ででもなおすことができると思える人々がいる。われわれは、そうした人々に、教条は牛の糞よりも役にたたぬと告げるべきだ。牛の糞なら肥料としてつかうことができる」と。

第三の特徴——そしてこれが最も重要なのだが——は、中央、つまり国家権力に関する意識である。たとえこうした権力の中心が最初にはたんなる潤滑であるとしても、それは侵略的な位置にいた権力の形態なのだ。村落の手入れにでかけた一隊は食料その他をもつてそこに船つてくるし、軍隊は、そこから、あたえられた指令をもつて出発する。党の宣伝家たちは、そこで中央の説明をきき、そこに報告をもちだす。すべての人々は、中央を支持するために活動し、これをもちだして、「権力を奪取するための幹部」を成長させる。

毛沢東の軍隊——党の幹部が都市の労働者にあつたと

ことだった。「われわれはただひとつの道——つまり下からの変革しかみとめない。われわれは労働者自身が下から経済的諸条件に関する新しい原則をつくりあげることのぞんだ」。

古い国家機関は一九一七年の一月から一九一八年二月までの間に粉砕されたが、これは革命の仕事のなかで一番容易な部分だった。困難な仕事、つまり決定的な仕事はこれにつづいた。レーニンはつぎのように述べた。全人民は「一人のこらず」国家を統治し、経済を管理せねばならぬ。そして、そのためには、「都市と農村の間の差別、ともに肉体労働者と頭脳労働者の間の差別を廃止することが必要なのだ」。

右にレーニンが述べたことが其の共産主義の目標だという証拠は、其の共産主義の方式が、カウスキーやメンシエヴィーキや社会革命党員や彼らの愛するベルンの「兄弟たち」(一九一九年二月に、第二インターを復活させることを目的としてベルンにひらかれた会議に集った社会民主主義者たちのこと)のもつたいふつた、複雑な表現を用いる美辞麗句とちがうところは、後者が一切を労働条件に還元した点にあつたといふ事実のなかにみられる。

そこで、もし共産党が、官僚化されないうで、大衆のみが勢力でないうことを共産党は彼らにかつてないうるのだと考えはじめたりしないならば、そのとき、——そしてそのときはじめて、人民は社会主義の方にむかつて

理論の新しい出発点

— 帝国主義下の植民地革命

「われわれは、現在解放を勝ちとりつつある後進諸民族にとつて、国民経済発展の資本主義的段階が不可避だという主張を正しいものとしてとめることのできるだろうか?」(「コミンテルン民族植民地問題小委員会への報告」形勢レーニン三巻選集(八)六八二頁)レーニンは右のように述べ、ついで民族問題と植民地問題に関する小委員会の名前でハツキリとつぎのように答えた。

「われわれは、この問いにたいして否定的に答へねばならぬ。……われわれは……先進諸国のプロレタリアートの援助によつて、後進諸国はソビエトにいたり、そして発展の一定の段階を経たのち、資本主義的な発展段階をとらずに共産主義にいたることができたらうという命題にたいして理論的根拠をあたへねばならぬ」。

こうした従来のべていた主張をゆるがせる陳述が、彼自身の国のナロードニキ、すなわちロシアは資本主義的な発展段階をとびこえることができる」と主張していた人、人物の口から述べられたということは、いくら強調しても強調しすぎることはない。

今日、オールが、インドはパンチニヤイト(村落評議会)を通じて直接に社会主義にすすむことができると考えているのと全く同様に、ナロードニキは、ロシアはミ

くることができるとだ。

「すべての市民は一人のこらず、裁判官として活動し、国の政府に参加せねばならぬ。そしてわれわれにとつて最も重要なことは、一切の労働者を一人のこらず国家統治に参加させることだ。これは極めて困難な仕事だ。だが、社会主義を少数者によつてつまり党によつて導入することはできない」。

この言葉は、たんに党の外部の人々にきかせるために語られたのではなく、党大会の出席者にむかつて語られたのだ。さらに、この言葉は、権力への途上にある人物によつて語られたのではなく、権力を握っている人物によつて、党は、その綱領を改定するにさいして、どうして、なぜ党が権力をかちとつたかということを決して忘れるべきではないことを強調するために、語られたのだ。彼は、権力をにぎつた党はまだわずかに階級の中の少数者にすぎないが、社会主義は「数千万の人民がいかにして権力で一切の仕事を行なうべきか」ということを学んだとき、彼らによつてはじめて導入されることができるとだ。『ロシア共産党第七回大会への報告』形勢三巻選集(六)八八一頁」ということを強調するために語つたのだ。

二年後に植民地革命が歴史の舞台に突如としてあらわれたとき、レーニンをして、こうした革命を彼の理論の新しい出発点たらしめたのは、まさにこうした類いの見通しだったのだ。

ール(村落共同体)を通じて直接に社会主義にすすむことができると考えていた。レーニンは、彼らとはげしく争ひこの理論闘争にうち勝つたのだ。たしかに歴史は彼の判断を支持した。

きわめて根本的で客観的なものだけしかレーニンの考へたのなかにこうした完全な変更をもたらすことはできなかった。実際、世界を震撼させる二つの事件こそがこうした変更をもたらしたのである。第一に、一九一七年の革命は、ロシアよりも技術的に一そうおくれている国を助けにすることができた労働者国家を樹立していた。第二には、植民地革命自身が帝国主義時代の最良の革命的な役割をまさかにはしていたのだ。

一九一六年の復活祭週間に勃発したアイルランドの蜂起はい、レーニンに、必ずしもすべてのイニシアティブがあらゆる時期に労働者階級だけから発するものではないということを強調させたのは、資本主義の帝国主義的発展の現段階と民族革命の特殊段階とに関する右のような知識だった。彼は、プロレタリアイトが史上最大の革命、すなわちロシアにおける十月革命を達成したときにもこうした立場をかえなかつた。いや、この革命はかえつて、独立を求めて闘いつつある小民族が社会主義革命の力をとどめなつたことができるように、革命を達成しつつある工業国の労働者階級は低開発諸国を援助して資本主義的な工業化を回避させることができるといふ、歴史の弁証法の真理を強調したのである。

こうした理論の新しい出発点——資本主義なき工業化——は、もちろん、先進諸国の労働者階級は、低開発国の兄弟たちを助けにすることができると、またくるだろうという前提の上にたつていた。

コミンテルンの歴史にかきとめられた、こうした真は、たんにスターリンによつて抹殺されたばかりでなく、トロツキーによつても抹殺されてしまった。つまり、スターリンの政策は一九二五年から二七年までつづいた中国革命を破滅させたし、トロツキーは永続革命の理論を復活させるためにまさにこの時期をえらんだのだ。永続革命、つまりブルジョア革命の段階でストップすることなくプロレタリア革命ないし社会主義革命の段階まで継続する革命という考えは、一八四八年のヨーロッパ各国の革命からひきだされた教訓として、カール・マルクスによつて最初に提唱された。そして一九〇三年から六年までには、トロツキーはこの理論を、一九〇五年および一九一七年のロシア革命を分析し、これを先取りする理論として発展させたのだ。一般には、永続革命はたんに世界革命と同じ意味の言葉になつたが、トロツキーは一九三〇年に、永続革命についての彼の考えは、「永続革命の理論は、後進国にとつて、民主主義への道はプロレタリア独裁を通じて到達されるという事実を確立したものだ」ということを強調した。ちようど国家資本主義時代が農民ならびに民族革命に関するレーニンの分析の正しさを証明していた時、トロツ

キはこれまでもより一そうよく、彼の理論を、中国の農民反乱はプロレタリアートの闘争の残存物以外の何ものでもなく、プロレタリアートの側から新しい刺激があたえられた後にはじめて再び勃興するだろうという内容でかきつけたのだ。

トロツキーによれば、第一に、ツァール・ロシアでは社会主義革命が成功する可能性は、農民を指導する労働者階級の力に左右されるものと考えられていた。ついでその後、労働者階級とは、プロレタリアートを指導する党を意味することになり、最後に、それは、労働組合をつかりのみを労働者の国家機関の問題になつた。レーニンが「遺言」のなかで、トロツキーの「行政的心理」にたいして闘わねばならなかつた理由は、まさにこの点にあつた。結局のところ、ロシアにおける発展についての輝かしい予言としてはぐまつたものは、彼の晩年には中国に現実に発展しつつあるものに目をふれないで、お

現代中国の光に照らされた、トロツ キーの永続革命論

農民の役割に関する評価についてのトロツキー自身の言葉は、「農民を過少評価している」という、スターリニストの後にたいするどんな非難よりもはるかにハツキリとこのことを語っている。毛沢東は、彼が一九二七年

れるためには、一そう進んだ集中化された階級によつて指導される必要がある」と。

一九四〇年にかかれた彼の最後の著作のなかで、彼は傷むところなく、ロシア革命と永続革命に関する彼の考えをくりかえした。「農民は独力で、自己自身の利益をハツキリと定式化することさえできなかった。……わたしは、たえずくりかえして、永続革命の理論を発展させこれを基礎づける仕事にかゝつていつた。農民は全く独立した政治的役割をひきうけることはできない」。帝国主義と国家資本主義の時代の現実にこれほど遠くはなれなかつた理論は、それ自身のもつ空虚さによつて崩壊せねばならなかつた。今日のトロツキストたちがトロツキーの永続革命論と毛沢東の「人民公社」の双方に

かけて書こうとすることができるといふ事実は、力なき抽象と行政的心理とは、権威をつきつくすためには、偉大な大衆反乱に身をゆだねるよりも、むしろ何らかの国家権力にしがみつくだろうということを示すにすぎない。私たちは、こうした考えが植民地革命の昂揚にたいして私たちを盲目にすることをゆるしてはならない。私たちの時代が成熟したことは、たとえばエジプトにおける学校の反乱の場合のようにたんなる宮廷革命でさえも、ある程度の土地改革を行い「革命的な改革」を約束するためには、農民大衆や学生、労働者の革命の昂揚によつて推進されねばならなかつたという事実のなかにみられる。問題の要点は、経済状況——つまり資本主義の世界的段

にかいた都市の農民運動に関する観察報告のなかで、農民の反乱のなかに新しいものをつかんできたのだ。トロツキーはこうした農民運動のなかに新しいものを無視する点では、スターリンと一致していた。一九三〇年に、彼がロシア革命という主題にたしかえつたとき、彼はつぎのように書いた。「全体としての農民たちがいま一度——彼らの歴史上ではこれが最後の時期だつたが——革命的な要素として行動することができるとを知つたという事実は、同時にこの国における資本主義的諸関係の弱さと農民たちの強さを証明する」と。彼がレーニンについて、「ロシアの農民運動の真の歴史的意義をこのようにハツキリと示したことは、レーニンがはたした最大の貢献のひとつだ」といふ事実は、ある点には、右のような判断が彼によつて下されたのだ。

階級だけから出発しないで、同時に政治的な成熟度をも考慮して出発することだ。自由のために闘い、そして死んでゆく人民こそは、たんに政治的にはかりでなく、まさしく政治的根拠において一つまり人類がいかなる種類の労働を遂行するかを決定するにさいして運命を自己自身の手中に握ることができると十分に成熟している。オートメーション時代において人類がいかなる種類の労働を遂行すべきかを問おうとするほど十分に前進した人民は、ますます多くの機械をという答からはなれてしまった。彼らは、階級的な答こそが人間主義的な答だということを知っている。以下にのこされた仕事は、そうした人間主義的な答とは一体何であるかを問うことだ。

マルクス主義的人間主義

ひととはパンのみで生きるものではない。だが、生きるためにはパンを手に入れねばならない。マルクスの人間主義的唯物論は、現在の植民地革命にたいして、直接的な答えと長期的な答えの双方をもっている。人間主義にたいする現在の共産主義者たちの攻撃は決して偶然ではないし、理論のこまかい点をあげつらうものでもない。こうした攻撃は、以上にあげた民族革命の運動が労働階級の運動とともに、国家資本主義の死の把握から身をとまはなして立ち上るかどうかという問題におとらぬ、基本的な問題に関連している。

いっしんをいっていたのだが、ソ連の「共産主義」は、資本主義の主要な要素すなわち労働者には最小限度を支払い、彼からは極大限度を搾取することの上にあぐらをかいている。そして彼らは、これに「計画」という尊称をさすけているのだ。だが、マルクスはこれを価値ならびに剰余価値の法則となづけた。（邦訳「海外と革命」八頁）

一九四三年に行われた、価値に関するマルクス主義的な分析との対照がソ連労働者にたいする搾取の根拠を意味したと同様に、一九五五年から五六年にかけて「とくにハンガリーで行われたマルクス主義のもつ人間主義にたいする攻撃は、ソ連の共産主義者たちが東欧にたいする帝国主義的な支配を維持し、経済援助によつて植民地世界にあらたに介入することを意味した（同）。

一部には、ソ連の共産主義者たちの「援助」はアメリカ帝国主義のポインツ・フオア計画の援助とはちがうと考える人たちがいる。私たちが見てきたように、さらにその他の人々は、共産主義をストッパさせるために全く絶望的になつて「キリスト教的偽善主義」を売りこもうとしているので、彼らは、偽善的植民地の開発にはアメリカの国民所得のわずか一％しか必要ではないと主張している。だが、真実のところ、ソ連の国家資本主義もアメリカや「その富裕な同盟者」（西ドイツのクルップ帝国の首をもくめて）の利益も、決して、永久に世界経済を再建しはしないだろう。

私たちは、スターリンがマルクスの価値論を修正することにきめたのは、英雄的なソ連人民がナチの侵略者たちを撃退しつつあった、第二次大戦のさなかにあつたことを知つておき必要がある。外見上ベダンテイツクにみえる論文「経済学教授上の若干の問題（同）」を発表する年として一九四三年がえられたのだが、その理由は、この年はソ連の生産管理者たちがアメリカのウェルト・コンベヤーの技術を「発見した」年にあたつていたのである。この年にこうした論文を発表したことは、ソ連人たちに戦後に労働条件の更なる改善を期待しないようにと告げるスターリン式の方法だつたのだ。

マルクスの搾取の理論は、彼が価値法則を資本主義発展の法則として分析した成果の上にたてられていたのだから、ソ連の理論家たちも、一九四三年までは、彼らの固いいわゆる無階級社会における価値法則の作用を否定してはいた。マルクス主義の修正は、価値法則がソ連で作用していることを認めると同時に、しかもソ連が「社会主義国」であると主張することを可能にするために必要だつたのだ。こうした修正は、教師たちに経済学を教授する場合マルクスの「資本論」の構成に従わないようにと要求する形をとつた。

私が「マルクス主義と自由」のなかでかいたように、「マルクス主義は解放の理論がいかなるものでもない。マルクスは人間の自由と、資本主義の発展の絶對的・一般的な法則である人間の生命の不可逆的な浪費とに、つよ

世界経済は、たんなる機械の建設や私的な国家的な利権とはちがつた起動力によつて運動される全面的に新しい基礎をもたねばならない。ただ、質的にちがつた種類の労働、つまり民衆の創造的エネルギーの解放から生ずる労働だけが、世界を新しい人間の基礎の上に再建することができるとだ。

だが、私たちは現在、原子時代のなかで生活している。原子エネルギーとオートメ化された機械とは、産業全体の発展を、これとくらべれば爆発的にのべられている奇蹟でさえ負しい想像の素材となつてしまふほど高速度におしすすめることができた。これはオートメ化でもないし明日でもない。技術的にはこれはまさに今日の事だ。原子エネルギーを燃料とする動力工場はすでに作業をはじめている。ソ連は人里はなれた不毛の地帯で湖水を爆発する計画をもつていてと主張している。アメリカの大企業の間には、ただ一箇の原爆によつて北アラスカの巨大な港灣を建設する計画がすすめられているといつてゐる。

だが、たとえ原子エネルギーがサハラ砂漠やゴビ砂漠の中に人造湖をつくり、現在のかんはつ地に雨があるように山を移動させるために利用されるとしても、たとえこうした企てが空想家の夢ではなく、今日技術的に可能なことであるとしても、それにもかかわらず、私的資本主義である国家資本主義であるとを問わず、資本主義にとつて、こうした企てを實現することが現在もしく

は近い将来にできるだろうと想像することは、最も馬鹿げたことだろう。

資本主義は、世界市場の拡大にそうしたことを企てないばかりでなく、自己自身のためにもそうしたことを企てることはできない。ヒロードのように快速な「生産費にあらがひ」一定の利潤をプラスする「契約を要求するアメリカの民間の株式会社と同様に、フルンチョフのロシアは、いわゆる「宇宙開発」のためではなく、大陸間弾道ミサイルの生産のためのロケットの開発に数十億ドルを支出せねばならぬ。世界資本主義の両極は、科学を強制して、これを戦争、すなわち私たちが知つてい

るように文明の終焉を招くに十分な戦争、のために働かせることに忙しい。

「科学を強制する」という表現によつて、私は、現在階級社会で形成されているような科学自身が現在とはちがつた方法で働くことを切望している、といふと思つてゐるのではない。はるか以前に、マルクスも、こうしたことを予見していた。すなわち、一八四四年に、彼はつぎのように書いた。「生活のために一つの基礎をもつ」ということは本来ひとつの階級なのである」(「マルクスと経済学哲学草稿」坂本・田中訳、岩波文庫版一四三頁)と。

マルクスは近代科学の狭小路を予見していた。それは、彼が予言者たつたからではなく、彼が人間を一切の人間の尺度とし、それゆゑ一切の階級分裂の根柢に、肉体的

人間が人間として生きることに従事しているのは、まづにこうした理由のためだ。ソ連の専制者たちには、この階級の風流は、なにもにも奨励することなく、たえずやむことなく流れてゐる。衛星国では、こうした階級の風流はソ連の専制者に全く休息するひまをあたえていない。

こうした反逆は、資本主義者の階級の内部にさえも反映された。こうして、一九五五年から五六年にかけて、ハンガリー共産党中央委員会から退放されたイムレ・ナジがしたためた一書翰のなかで、彼は中央委員会にたいして次のように断言した。すなわち、もし大衆が人間主義の方にむかうなら、それは彼らが「資本主義へ傾くことをのぞいてゐる」からではない。「……彼らは、労働する人民が祖国と彼ら自身の運命の主人公であり、人間が尊敬され、社会的・政治的生活が人間主義の精神と結びつけられてゐる、人民の民主主義をのぞいてゐるのだ」と。

ペトフィ・サークル(一九五六年のハンガリー革命の先頭にたつた作家集団のこと)のなかで、ハンガリーの共産主義作家ティボル・デリーは、一九五六年六月一日に、つぎのように声明した。「われわれは非常に多くのもののために闘つてきたので、最も大切なもの、つまり人間主義のことを忘れてしまつた」と。だが文藝者の地位についていた官僚たちは、こうした言葉に耳を傾けようとはしなかつた。なぜなら、とくに、人間主義

なものや精神的なもの、科学と生活自体の間の分裂が存在することを認めてつたからだ。

もし、こうした根柢的な分裂の結果搾取にもとづく社会以外のなにかが生れることができると考へてゐる者がいまでもいるとするならば、彼らにいま一度ソ連とアメリカとを眺めさせ、科学がこの問題をどこへ導いていつたかを見てもらおう。

資本主義社会に浸透し、一切のもののその反対物をあたえる二重性は、オートメーションつまり人間の労働の生産力をたかめるかわりに、労働者を過重な労働にかりたでるとともに彼を職場からなげだすもの、にみちびいた。原子の分裂からは、決して地上最大のエネルギーは生れず、地上最大の破壊の兵器が生れた。

分別のある科学者は、中間階級にそくしているにもかかわらず、現在こうした状況をみぬくことができず、腰が最初に爆弾を投下しようとも、「われわれは全面的な絶滅から半時間の距離にある」とのべたのは、ウイリアム・ビカリング博士だつた。彼はつづけてつぎのようにのべた。科学者たちは強力で助力することができないから、われわれは、人生にたいするまづたくちがつたアプローチを、「人間の心臓と精神から生れる新しい統一する原理」を発見せねばならない、と。

こうした統一する原理は、マルクス主義の人間主義のいふ何ものでもありえない。それは、同時に低開発国の大衆と先進国の民衆との統一一点なのだ。

は「工場内部における自主的な管理と労働者の民主主義を奨励すること」を意味するものと解釈されたから。全世界の人々が知つてゐるやうに、人間主義者の闘いの次の段階は、理論ではなくて行動——すなわちハンガリー革命だつたのだ。

無慈悲な資本主義者は、ハンガリー革命を粉砕したのだが、この事件は、その後ビルマやインドやマラヤに遊山旅行にでかけてそれらの国の人々にむかつて植民地主義からの解放についてしやべつたのち、最近帰国したフルンチョフとブルガーニンの顔をそれほど微笑にはこぼせしなかつた。

ソ連の共産主義者たちが一切の人間主義者に疑いかかつたのはまさにこの時だつた。「コムニスト」誌(一九五七年第五号)は、レーニン主義は「どんな種類の「人間主義化」をも、また「人間主義的社会主義」の主張者によつて提起されるどんな改革をも必要としない」という方針をうちだした。この当時までに、支配者の地位についていたポーランドの共産主義者の官僚たちは、すでにこうした「方針」を承認しており、攻撃は一切の「修正主義者」にたいして開始された。政治局長のイエジ・ミロウスキは、作家会議の前夜にあつてつぎのやうにのべた。「一切の修正主義者たちは、自分たちを創造的マルクス主義者としてえがいてゐる。だが、マルクス主義はただひとつしかない。そして、それは究を導くマルクス主義だ」と。

ポーランド共産党の攻撃は、まさにそうしたものに
なるをえなかつた。なせなら、人間主義が勃興し、ハ
ンガリー事件にインスピレーションをふきこんだのはま
さにポーランドだつたから。ポーランド人自身は革命の
一歩手前にとどまつたけれど、彼らはハンガリーの危機
のち原則に立脚しようとする若干の試みを行った。こ
うして、一九五七年四月二十八日の「ノヴァ・クルトウ
ラ」誌はつぎのように述べた。

「共産主義の理想は、社会の全領域における海外から
人類を—そして社会のワクの内部にいる個人を、解放す
ることを要求している。その目標は、大衆の真の主権を
獲得し、自由をうはわっている人々と人民にたいして責
任をとらない支配者のグループの間の分裂を一掃するこ
とだ。共産主義—すなわち生活の中に投ぜられた人間主
義の理念は、普遍的である」。

一九五九年までには、鉄のカーテンはかたくとざされ
ポーランド共産党の第三回大会は、その決議のかなり
多くの部分を、「インテリな左翼の首領でかこいながら
修正主義者たち」に反対する方向にむけた。「……そし
てこうした左翼の首領は、多くの正直だがイデオロギ
的には弱い同志たちも、教条主義者たちの列におしやつ
た。これらの教条主義者たちはデマにみちたおしやべり
の助けをかりて、マルクス主義と共産主義との唯一の公
認された擁護者としてたちあらわれたのだ」。

最終日に、「全ソ連政治的ならびに科学的知識普及協会
の理事長」といつたいかめしい肩書をもった、党の宣
部のM・シ・ミーチンは、私たちにむかつて、もし私
たちが真の（？）人間主義を探究しつつあるものとするは
私たちが一体どこに目を注ぐべきかについて語った。
「マルクス・レーニン主義的社会的人間主義という
社大で高貴な考えは」まさにフルシチョフの報告のなか
にあつた。もし諸君が彼らをやつつけることがで
きないならば、彼らと手をつなげ！という規則は維持
されたように見えた。彼の偽善は、つぎのべる節の
なかにハッキリと示された。ミーチンは一切の「修正主
義者」を、—そしてとくに「ユーゴ修正主義」を攻撃し
た。

「彼らが主張するように、ソヴェト国家の発展は『官
僚主義的統制の傾向』を意味するとか、社会主義国
家が社会主義と共産主義とを建設する場合に決定的な役
割を演ずる原則は『マルクス主義のプラグマティクな
統計的な修正』がいかにものでもないとかと、中傷
的に主張することは、もしそれが背教でなく、レーニ
ン主義からの完全な退却でないとするならば、そもそも何
であらうか！」

だが、こうした演説がソ連の共産主義者たちの間の生
硬な神経に打撃をあたえた理由は、それが傾向的であろ
うとなかろうと、理論的でないでなく、チトーが新しい
アフリカやアジア諸国の重要性をしつてゐるからだ。彼

は「中立的」諸国を強く誘引してゐた。しかも、
ソ連の政策をバロメーターするためにそうしてゐたのだ。
ここで問題となるのは、チトーがソ連のかわりに何を
提出しているかということだ。国家資本主義が自己を
「修正主義」となつてくるといふと、国家資本主義
は私的資本主義より多くの強りをもつてはいない。
両者ともたまた自由にいたる道を見出そうとしてゐる
新しい力をストップさせようと試みてゐる。

アフリカ革命の指導者たちは、プロレタリアであれ、
農民であれ、未開人であれ、とにかく大衆の創造的なエ
ネルギだけによつてはいない。それは、彼らが「教
条主義的なマルクス主義」から独立しているからではな
く、彼らが工業化への資本主義的な途によつてゐるか
らだ。

もちろん、低開発諸国は、援助を必要とする。なによ
りもまず、彼らは水を欲している。だが、経済が労働者
管理のもとにおかれていないところでは、—そして現在
ではこうした状態におかれてゐるところは、どこにもない
が—援助はきつめて貧しく、援助をうける国をたえず
核戦争のことはかりを考へてゐる権力機構のひとつにま
きこもとするひもつきのものとなるだろう。

自由のための彼らの闘争を先進国の民衆の闘争と統一
する原則を発見することなしには逃れ途はない。汎ア
フリカ主義を通ずる道には中道はないし、中国の人民公社
を通ずる道は自由な近道ではなく、全体主義的な

国家資本主義にいたる道である。

全世界にわたる大衆の統一闘争によるほかに逃れ道
がないという事実、決して、植民地ないし半植民地諸
国が「不可逆的に」資本主義的な発展をたどることを非
難するものではない。

自己の自由のために闘うにいたるまで十分に成熟した
人民は、自己自身の社会を再建する事業のなかで運命を
自己の手中に握るまで十分成熟してゐる。マルクス主義
者の用いる常套語は、ほかの一切の常套語と同様によろ
しくない。そして、勝るにたつたほどの労働者階級をも
つていない人民にたいして、「ただプロレタリア革命が
おこりさえすれば……」等々と告げることが、全く誤つ
た種類の常套語なのだ。

レーニンの理論上の新しい発展はまさにここにあつ
た。革命のインシアティヴは、必ずしもつねに労働者
階級のもとにあるのではない。レーニンは、孫逸仙の時
代に、ペルリンにいたる道は北京を通ずるかもしれないと
いつた。世界の人口の圧倒的多数は東洋に住んでゐる。
そして、私たちは、植民地革命の新しい偉大な力を理論
上の新しい出発点としてつかまねばならぬ。

これはもはや理論ではなく事実なのだ。こうした事実
を無視することは、歴史から私たち自身をよみおすこ
とだ。そうしたことの証明は、理論上でも実際上でも人
間主義的な形態をとつてきた、共産主義的全体主義にた
いする反対のなかに横たわつてゐる。同じことは、西欧

同前掲書二四二頁（前掲邦訳書六八二頁）。

同原書には脚注がのせてないから、引用論文は不明だが、ほとんどこれと同様な文章は「永続革命論」第十章「永続革命とは何か？」第ホテセ中にある。「トロツキー論」第五巻三〇九頁、現代思潮社版。

同毛沢東「湖南農民運動考察報告」（一九二七年二月）

（毛沢東選集第一巻、三一新書版）はコララッド・

ブランド、ベンジャミン・シユウオルツ、ジョン・

ク・フエアパンクの「中国共産主義のドキュメント

史」のなかにみられる。

同レオン・トロツキー「ロシア革命史」第一巻四〇七

頁（山西版「ロシア革命史」（二）角川文庫版二四

六二七頁）。

同前掲書四〇八頁（前掲邦訳書二四八頁）。

同ハロルド・R・アイザックスの「中国革命の悲劇」

によせたレオン・トロツキーの序文。

同レオン・トロツキー「スターリン」附録三「ロシア

革命についての考え」四二五頁。

同「トロツキー・ラクーチニール」、『転換期にあるエジ

プト。

同この論文は最初、「マルクス主義の旗のもとに」

の一九四三年七、八号に発表された。それは私によ

つて翻訳され、「マルクス経済学の新修正」と題す

るコメントをつけて「アメリカン・エコノミックス・

」

「ソ連の新聞のカレント・ディジェスト」誌の一九

五九年六月三日号に翻訳されている。この「ダイジ

ェスト」は、一般に、英語を話す国民の手に入る最

も信頼ある出版物だ。なぜなら、それには公式の共

産党の出版物からの翻訳以外はふくまれないから。

同このことは、共産主義者はかりでなく、トロツキス

トをも特徴づけている。「インターナショナル・ソ

シアリスト・レビュー」の夏期号と春期号（一九五

九年）のなかで、トロツキストたちは、若きマルク

スの哲学に関する数々の手稿にたいする攻撃を開始

した。「社会主義と人間主義」と題された、これら

のもつたふたつた論文は、私たちに、人間主義と

は、マルクスが「通過した」一段階だったと断言し

ている。これらの論文の著者ウィリアム・P・ワー

ドは、これらのマルクスの偉大な作品をあえて「未

成熟なマルクス」の産物となづけようとしている。

同共産主義者たちは、三二年もおくらせたのちに

マルクスが一九四四年にいた経済学哲学草稿の英

訳版を、これに若干の気まぐれな脚註をくつつけて

発表した。ワードは、この点でも共産主義者と行を

ともにしているのだろうか？ マルクスが「こうし

たものとしての共産主義は人間の発展の目標ではな

く、人間的な社会の形態ではない」（城塚・田中訳

「経済学哲学草稿」一四八頁）とかいた箇所は、共

産主義者たちは、「こうしたものととしての共産主

レビュー」（一九四四年九月号）に発表された。こ

の論文は同誌上で一年つづいた論争をひきおこ

したが、この論争の最後には私は「マルクス主義の修

正が再確認か？」と題する回答をたずねて再び同

誌に登場した。この論争と一九五五年に行われたマ

ルクスの人間主義の修正に関する論争は、私の「マ

ルクス主義と自由」の中に詳しくのべられている。

同「マルクス経済学の新修正」および「マルクス主

義の修正が再確認か？」の二論文は長崎造船社研

究「ソ連経済と価値法則」に収められている。

同「哲学の諸問題」（一九五五年）参照。ただしロシ

ア助版でしか手に入らない。この論争が理論的な傾

城から東欧の革命を攻撃し、これを弾圧するといふ

実践の領域に移されたとき、その文獻はポーランド

やハンガリーの雑誌の誌上では十分に紹介された。

この文獻の多くは、それらしい英訳版でも入手され

ることになった。

同「共産主義に関するイムレ・ナジの見解」中の「新

路線を防衛して」四九頁（邦訳あり）。

同ポーランドの出版物をフォローできない人々は「東

ヨーロッパ」誌のなかに多くの翻訳を見ることがで

きる。イエジミロウスキの報告は同誌一九五九年二

月号ののせられている。

同「東ヨーロッパ」一九五九年五月号ならびに六月号

の「ブラウダ」一九五九年二月六日号。この文章は

「共産主義」という言葉のもとに、マルクスは、こ

こでは根

野な平等主義的な共産主義のことを考えている……」

と注釈をつけた。

今日の共産主義者たちをなやましていくものは、

「平等主義的な共産主義」にたいするマルクスの批

判といわれているものではない。彼らの意図をつい

ているのは、マルクスが財産の国有化を強調してい

る点ではなく、彼が個人の自由を強調している点だ。

つまり、それは、国家共産主義にたいするつぎのよ

うな彼の予言的な警告なのだ。「われわれは、と

くに、社会を抽象物として個人に対立して再建する

ことをさけるべきである。個人こそ社会的本質な

のだ」（前掲邦訳書一三四頁）

附録一

新しい人間主義—アフリカの
の社会主義

疲弊したアメリカの知識人が冷戦と、アメリカとソ連の間の核戦争の脅威にすっかり洗脳されて「イデオロギーの終極」をうまく訴えているとき、自己自身の生命さえ犠牲にして自由のために闘っている世界、すなわちアフリカはダイナミックな観念の躍動にみまわれていた。レオポルト・セザール・セングールが、彼の著書「アフリカ連盟の立憲会議のために」行つた一九五九年六月の報告のなかで述べたように、「歴史との出会いを待つことを拒絶し、自分が独自の使命の担い手であると信じるような民族、——こうした民族はすでにその生命をおいて今にも博物館におさめられようとしているのだ。アフリカの黒人は、出発する前にすでに生命をおえたりはしない。彼をして静かにせよ。いや、なによりも彼をして行動させよ。彼をして、普遍的な文明の建設を助けるために静かなるうちに、彼のメッセー

ジを世界にとどかせようではないか」。

「アフリカ革命が世界地図をかきかえつつあるとき、白人文明のこの優越は、たんに支配階級の内部ばかりでなく、多くの西側の社会主義者の間にもみられる。こうして、シドニー・レンスは、あたかもアフリカの革命が理論的な貢献がトム・ムボヤの「一人一票」からなりたっているもののようにかいている。」「一人一票」とは「民主主義的な文明」としてありあっている白人支配にたいする革命とはほとんど同じものであることをあらわかにしているが、しばらくこのことを除外しておくとしても、こうした知識人たちは、彼らが、アフリカの男気や自由のための闘いへの全面的な献身についてはいわずもがな、少くともアフリカの知的把握力だけにでも匹敵するまでには、永い道を歩まねばならない。

そのスピーチのなかで、セングールはつぎのように述べた。「マルクスの積極的な貢献を要約しよう。彼の果した貢献は、人間主義の哲学と、経済理論と、弁証法的方法なのだ」と。セングールは、深い理解から生れる単純さをもつて、社会主義は人間主義的であるとともにもう一つの方法だと語った。彼が、「ひらかれた社会主義」とあるのは「アフリカ型の社会主義」となっているものに相違する。マルクス主義を思想的な社会主義ならびに宗教と結びつけることを目標にしているという事実には、主観的な動機がなくてはならない。だが、このことは、彼が、マルクスの人間主義を、「伝統的なアフリカ文明、

二つの文明が植民地主義やフランス文明に遭遇した結果、アフリカの経済的資源や潜在の可能性、ならびにそれらと工業的先進国の経済との必然的な相互依存関係といった三重の総合的理論的基礎をたらしめようとしていたことを、はややすものではない。

マルクスの解放理論はきわめて強力で、分権化させる力だから、中東や中東やアフリカをつらぬいて、仏教やキリスト教や回教などの種々の宗教によつてマルクス主義にいたる橋を見出そうとする種々の試みがなされている。このことは、ちょうど共産中国やソ連の例でこれと同様な試みがなされているのと同様だ。だが、ここでは私は、そうした日和見主義がアフリカの知識人をも特徴づけていると主張しているのではない。むしろ、私にとつては、彼らのマルクス主義にたいする批判の一部は、マルクスの思想の一部を形成しなかつた——そして、そうすることは到底できなかったらう——現在のアフリカの現実のせいだと思われ。だが、セングールによるマルクス批判のほんの一部分、とくに現在の経済に関する批判は、間違っているか、あるいは宗教の場合のようにひどく微妙である。セングールはつぎのようにかいている。「マルクスの無神論は、キリスト教が歴史的発展のなかでとつた偏向にたいする原始的なキリスト教の反動と考えられることができる」と。

「アフリカにおける抑圧はつねに白い顔をかぶっていた。このことはアフリカ人の心に重々しくのしかかっている

ので、彼らは、たとえ労働者のそれであろうと、一切の白い顔にたいしては反抗しがちである。こうして、セングールは、つぎのように主張するのだ。すなわち、ヨーロッパの大衆の生活水準は、「アジアやアフリカの大衆の生活水準を犠牲にしてはじめて」上昇した。だから、ヨーロッパのプロレタリアートは、「決して現実に、——わたしは有効にという意味でこういつているのだが——アフリカにおける抑圧には反対しなかつたのだ」と。(彼はわたしのもの——「アフリカ」セングールが彼自身、「現実に」という言葉を「有効に」と解釈せねばならないという事実そのものが、彼が、プロレタリアートの闘争と革命について知つて示していることを示している。右に彼のべた事実を、先進諸国のプロレタリアートにはなくこれらの諸国の政府当局に訴える口実として利用することは、今日ではたしかに余りにも容易だ。彼が右にのべた事実が、白人のプロレタリアートばかりでなく北アフリカ(アルゼリア)の革命家たちをも拘束しつつあるドゴールにたいする弁解をもふくんでいるとき、それはたしかに余りにも高い代償だ。ドゴールのフランスにたいするアフリカの闘争についての一切の具体的な問題については、セングールがドゴールの弁解人として現われねばならなかつたという事実は、オートメカ化された後時代のなかで自由のために闘いつつある低開発諸国の悲劇をバクロしている。

他方、国民がフランス共同体の一部にとどまることを

あえて拒絶したギニアのセクトーレは、もつと大胆な考えをもっている。

「思想の領域では、ひとは世界の覇権だ。と主張することが出来る。だが、一切のできごとが肉体的ならびに精神的な存在に影響を及ぼす現実生活の具体的な水準では、世界はつねに人間の煩悩なのだ。一切の思考する力——つまり発展と完成とのダイナミックな力——を発見することが出来るのは世界の中においてであるから、エネルギーの融合が行われ、人間の知的能力の真の性質が発見されるのもまた世界の中においてである。だから、そうすることによって彼自身をある程度人間の全体的な社会から排除することなしに、なんらかの思想の学系や、なんらかの思想の組織や、なんらかの人間家族を排除すると誰が主張できるだろうか？」

「一切の人間の知識の結果生れた科学はなんらかの困難をもたない。かくかくの発見の起源はどこかといった笑うべき論争にはわれわれは関心をもちない。なぜなら、そうした論争は、発見の価値に何ももつけない加えるものではないから。

だから、アフリカの統一は、本質的に、なんらの人種上および文化上の対立もなく、狭いエゴイズムや特権もなく、人民の間の普遍的な団結と協力を基礎にした新しい人間主義を世界に捧げているといわれることができる。このことは、西アフリカの諸国をこえ、アフリカ人民のおかれた条件や期待と同様に、高度に発展した諸国を分

裂させる争いからはるかにひきはなされている。

私たちは、こうしたアフリカの指導者たちが危険な一九六〇年代にどうした方向にむかうかを知ることはできない。だが、私たちは、新しい社会を建設するための理論的基礎に関する彼らの真剣な関心が、「西側の」知識人の指導者のなかにはこれに平行するものをもつていないことを知っている。

私たちの時代は「歴史の生誕の時」であり、思想ならびに革命にたいするアフリカ人たちの貢献は、新しい出発点にたつた社会再建の本質的な一部をなすものだ。

註

〔ダニエル・ベル「イデオロギーの終焉」ニューヨーク、一九六〇年〕

〔レオポルト・セダール・センゴール「アフリカの社会主義」アメリカ・アフリカ文化協会、ニューヨーク、一九五九年〕

〔シンドニー・レンス「アフリカの革命」、『リベレーション』一九六〇年一・二・三月号〕

〔セクトーレの演説はアブダレイエ・ディオップが、彼の「歴史におけるアフリカの道」のなかに挿入している部分からひいた。『アフリカ・サウス』一九六〇年四月六月号、ケープタウン参照〕

〔G. W. F. ヘーゲル「精神現象学」〕

附録二

アフリカとアメリカのマルクス主義的人間主義 なぜ新しいインターナショナルがないのか？

アフリカとアメリカのマルクス主義的人間主義者たちは、一つのものを共有している。それは、マルクス主義的人間主義の根拠にある固有のものが「他のすべての人」によって問題にされていることだ。

第二次世界大戦後の歴史のなかで最も人をエキサイトさせる負をかきしめたアフリカ革命は、その行動とその哲学への認識の点で、アフリカ社会主義にたいしてアメリカのそれに対する優越性をあたえた。独立によって、アフリカにおける社会主義のスポークスマンの見解は「公式のもの」となった。これに反して、資本主義のアフリカでは、マルクス主義は、一たんに共産主義者によつて変形されたものばかりでなく、マルクスが「徹底した自然主義もしくは人間主義」となすけたオリジナルな形のものである——「外国の理論」としてあつかわれている。

アフリカ社会主義のマルクスの人間主義にたいする関係についての疑問点は、アメリカにおける場合のように政府当局の原爆戦争に関する騒がしい叫び声にまたげられてその向うで隠されている第二のアフリカの声をきくことがむづかしいという事実には関係がない。むしろ疑問は、アフリカ社会主義者自身の矛盾した陳述から生ずる。私は、決してアメリカ社会主義の唯一の生ずるだといおうとしているのではない。私の意見はそれとははるかになされている。だが、アメリカでは、意見の相違は大声でせかれ、強調され、過度に強調されている。ところが、アフリカでは、汎アフリカ主義と、独立諸国の間に現在二つのブロックがあるにもかかわらずこれらの間の間に存在していると考えられている統一とを確信するといつたように同時に矛盾した発言が行われているのだ。たとえば、ナイジェリアにおけるスマムデ、アジキウエ博士とナイゼリア青年会議、もしくはガーナとナイゼリア、セネガルとギニア、マリとトーゴなどの間のように鋭く分裂してはいるけれど、——それにもかかわらず、すべての人々は、自分たちは汎アフリカ社会主義を擁護するものと主張している。不律にして、こうしたことは、汎アフリカ主義が、アフリカ社会主義とは何かということをも全然明かにすることなく、敢よりもむしろ味方の混乱を助長していることを意味するにすぎない。

世界的な哲学対支配的イデオロギー

私は、つぎの二つの点で、ビニール・アレクサンダーの「マルクス主義とアフリカの文化的伝統」(「サーグエイ」誌一九六二年八月)と題する論文に賛成する。

「古典的マルクス主義と伝統的な宇宙論の間に、よりむしろ、こうした宇宙論の残存物にたいする近代アフリカ人の解釈とアフリカ人によって解釈されたマルクス主義との間に、若干の類似点がある」こと。

「アフリカ人が『観念論と唯物論』をアフリカ化してオリジナルな全体にしようとする、両者の新しい結合をなしとけることに成功することは、決して全くなりえないことではない」こと。

だが、私が賛成しないのはつぎの点だ。すなわち、マルクスと毛沢東に同時に、ロシア革命が史上最初の労働者国家を建設してからつづいてのロシアを知るにいたつた点に、絶対的であると相対的であるとをわす、とにかく何らかの利益があるという点だ。たとえアフリカ人が、私とともに、ソ連が現在までにすでに労働者国家の全体的な反動物——つまり国家資本主義社会に転化されてしまったことを信じないとしても、ソ連と中国とは世界的な哲学であるよりもむしろ世界的な権力であり、そこに支配しているイデオロギーは決してマルクスが最初に提げた人間主義の哲学をつくりあげたとき、後の

脳中にあつたものではない、という事実はいざんとしてのことである。マルクスがつぎのようにかいたとき、彼はまさにこの点にたいして警告を発したのだ。『われわれはよく社会を抽象物として個人に対立させて再建することをさけるべきだ。個人こそは社会的存在なのだ』(『国家・田中訳「経済学哲学草稿」一三五頁』)。

「共産主義は直接の将来の必然的な形態でありエネルギーシユな原理である。だが共産主義は、そのようなものとしては、人間の発展の目標ではなく、人間的な社会の形態ではない」(『前掲訳書』)。

アフリカのマルクス主義的人間主義とアメリカのそれとの間にある親近さの要諦は、現代の、未来、つまり世界の発展——すなわち国際的な規模で究極まで進行されるべき未完成な革命とのかかりあいである。私がアフリカに旅行したのはこのためなので、たんに個人的に指導者の見解をきくばかりでなく、現在の危機的な歴史の転換期にさいして街頭や森林の庶民の思想をしるうとするためだ。

まず私は、汎アフリカ主義の三つの代表的な指導者——ナイジェリア人、セネガル人ならびにギニア人の見解をとりあげよう。私がアジカイウエ博士と会見したとき、彼はつぎのように述べた。

「私は理論を实践から分離することはできない。私たちがいっている哲学は、それを海外で評論してもらうように体系化されてはいない。その根拠を示させていた

青年と労働者とはちがつた社会主義を考えている

ア・ジカイウエ博士に反対する人々の苦情は、自由企業家が不幸にして、どんな犠牲を払っても利潤を獲得することを意味するということだ。私がラゴスで出席した青年会議と労働組合が開催した大衆集會は、別荘計画によって要求される予算の貧しいことに反対していた。

政府側の人々と街頭の人々の間には、彼らのいづくアフリカ社会主義の概念の間にちがいがあることがさきわめてあきらかだ。同様なことはセネガルにおいても間違いない。そして、もちろん、カサブランカ・ブロックとモンロビア・ブロックの間にも相違がある。だが、私がモンロビア大統領にこのことを尋ねたら、彼は、「そうした相違は決して重要なものではない。重要なのは、アフリカとソ連との分裂だ」とこたえた。

「ソ連共産党第三回大会の綱領はアメリカのそれと同様に——全く唯物論的で、電気洗濯機とテレビの文明だ」。

「あなた方は共産主義をもち、アメリカの自由企業をもち、そして両方では計画をもっている」。

「それそのイデオロギーは一つの真理をもっている。だがそれは、たんに部分的な真理にすぎない。一切が唯物論的ではなく、精神的なものに余地をみとめるイデオロギーはどこにあるのだろうか? そうしたイデオロギ

だしたい。私たちの生活は土地保有と結びつけられている。ここでは、土地保有は共同体的だ。という意味は、すべての人が土地に一定の利害関係をもっているということだ。すべての人は土地を完ることはできないが彼の息子たちはその土地の相続人だ。土地は彼らのものだ。彼らは、その土地を利権めあてに売ることができるといふ意味では、個人として土地を所有しているのではない。こうして土地は共同体的になったのだ。人々は土地を共同して保有する。だから、私たちのところには、土地のない農民はいない。……ここには永続的な労働者階級がない。現にそうした階級があらわれつつはあるのだが、ここには土地のない農民も、永続的な貧乏労働者もない。だから、マルクス主義的な社会主義は私たちに適用されないが、アフリカの、社会主義、ナイジェリアの社会主義は私たちに適用される。この理論が体系化されるべきことは疑ない。だが、そうしたことはまだやられてはいない」。

「私たち自身の社会主義の型である福祉国家は、決して共産主義でもないマルクス主義でもないシェビアン式ギルド社会主義でもないが、私たちの生活様式に適したものだ。私たちはこれに固執している。福祉国家は、基本的に社会主義的な信念に根ざしている。私たちの国民の大多数は自由企業を信じている。だが自由企業は、どんな犠牲を払っても利潤を獲得することを意味すべきだとは信じていない」。

「われわれのイデオロギーなのだ。」

われわれは、全く正当に、われわれが社会主義的手段を用いているとすべきだ、と私は考えている……」。

ネグリテュードは決して単純な復活ではない。それはアフリカの歴史と文化の近代への適用なのだ。われわれは、二〇世紀のアフリカのために新しい文明を創造することをめざす目的で、ヨーロッパの技術を取りいれているのだ。

「マルクス主義のなかには、決定論と、科学的で推理的な理性と、人間主義がある。革命は科学的である」ともに哲学的なのだ。アインシュタインは二〇世紀にそくするが、芸術家も二〇世紀にそくする。二〇世紀の文化は科学的文化以上のものだ。共産主義は決して全体的な真理ではない。それは抽象的であり科学的である。この点で、共産主義は共産主義に似ている。

「黒いアフリカでは、われわれは共産主義と資本主義から科学をとりいれることができ、そしてアフリカからは詩と精神的なものをとりいれることができるのだが、今日、黒いアフリカのための方法を発見する文化こそは、われわれが必要とする文化なのだ。われわれは、アフリカの文化を、ティルヘル・ド・シアルダンの人間学の結論を、欲するのだ。」

人間主義—抽象的なそれと具体的なそれ

「われわれは、共産主義を……」と主張する人々、それは、われわれが社会主義的手段を用いているとすべきだ、と私は考えている……」。

ネグリテュードは決して単純な復活ではない。それはアフリカの歴史と文化の近代への適用なのだ。われわれは、二〇世紀のアフリカのために新しい文明を創造することをめざす目的で、ヨーロッパの技術を取りいれているのだ。

全世界にきかれた「ノー」の声

すべてのアフリカの社会主義者のなかで、セク・トーレは、行動の歴史的なひろがりを見解の情熱性のためにアフリカとアメリカの双方の左翼の心にも訴えるところのある一人だ。

強力な（だが全能ではない）ドゴールのフランスにたいして彼の小さな口がさげんだ「ノー」の声は、その勇敢さと挑みかかる哲学の双方によつて全世界に驚嘆をあてた。

「すべての民族はいかなる時でも、自己自身を統治し、彼ら自身の個性を発展させることができる。奴隷制下にある場合や外国の抑圧のもとにある場合をのぞいては、弱小民族というものはない」というアフリカの大衆への信仰は、レーニンがロシア革命の前夜にあたって「革命はただ下からのみ」無敵となるべきことができると主張したとき、レーニンが示した広汎な展開力をもつていた。だ

この文章の筆者にとっては、セングール大統領の人間主義について気になるところは、それが、具体的、特殊

であるべきところである。一般的、抽象的だという点だ。セングール大統領とマルクスがえがいた社会主義との間の基本的な相違は、決して「精神主義」と「唯物論」の間のちがいにあつては、理論と実践の間のちがいにあつたのだ。私にとつては、アフリカ革命の悲劇は、その指導者たちが技術の後進性についての意識と工業化、しかも急速な工業化の必要によつて余りにひどく重圧をかけているので、援助を求めたためにはほとんど排他的に技術的に進歩した諸国の既存の権力の方にむかつて、これらの国のプロレタリアートの方にむかつていないという事実からでるよう思われる。ここでも一度、私は、どのアフリカ国家が、たとえドゴールのフランスであれ、ケネディのアメリカであれ、あるいはフルシチョフのソ連であれ、どの国のどんな資源から援助を受けることにも反対するものではない、と決意していることを、あきらかにさせていた。西側の帝国主義は数世紀にわたつてアフリカを掠奪し、その労働力と天然資源の双方を掠奪した。少くとも、こうしたアフリカの富の一部を、それを地と本道に所有して来た側にかえすには、いまが絶好の時期だ。だが、このことは、社会主義者にとつては、現在の主要な問題ではない。

現在の主要な問題は、なによりもまず独立を可能にした当のものの、つまり自己自身の人民との関係、であり、

が、レーニンが、たんに、国際的革命的発展としてロシア・プロレタリアートの天才を発見したのと対照的に、「アフリカの指導者は、抑圧者のそれと同様にプロレタリアのそれである」と社会主義のそれであるとをわす、一切の「外国の」イデオロギーを締めだしている。「アフリカは、その個性と文明と固有の構造にたいする尊敬を傷けて、なんらかの諸国家ないし諸イデオロギーの体系的有機的な構成物になることには賛成できない」。マルクス主義が理解と実践の統一ではないかのように、彼は、「哲学はわれわれの関心をひかない。われわれは具体的な必要をもっている」と主張している。

新しいインターナショナル

ギニアがドゴールのフランスにたいするその大胆な「ノー」の発言によつてなしたことは、人間的な要求を決定するものとして再建することだ。これは、新しいものであり思想における新しいものだった。これは、そして他のなにもでもなくこれのみが、現代には、まだハンガリー革命のなかで、ついでアフリカ・アジア・ラテンアメリカの世界で、そして最後にアメリカの黒人の間で翻刻されたマルクスの人間主義だった。これは、そして他のなにもでもなくこれのみが、大衆的

な労働党をもたない政治的に「おくれた」アメリカ労働者を生産点自体におけるオートメーションとの闘いのなかで、あれほど徹底的にしたのだ。山猫ストにたち、決してオートメーション化されない人間的な生産関係を要求するアメリカ労働者は、もし私たちが人類の絶望をもつておびやかす核戦争による大惨害をさけるべきだとするならば、全世界にわたって本質的な同様の新しい領域を期待している。

ロシアの共産主義者がヘーゲルの神秘主義を攻撃しているにもかかわらず、こうした神秘は、ヘーゲルが「その中にだけ理念がある自己決定は、自らが語るのをきかねはならぬ」とかいたときフランス革命の衝撃のもとで今日の具体的な現実を先取りしていた。

これは、独立したアフリカよ！ 世界支配のために闘っている世界権力の二大ブロックによつて汚されないで動れ！ 諸君はすでに諸君の政治的自治を獲得した。諸君はいま経済的独立のために闘いつつあり、そして理念の自己決定をも自由に表現している。なぜなら、数世紀にわたつて蓄積された思想は、大衆の偉大な創造性！ つまり今日の革命によつて実りみたらにされたからだ。ハンガリーの革命家たちの側での自由を獲得しようとするせい一ぱいの努力が、マルクス主義の理論にもとづいて教育されたにもかかわらず、ついにマルクス主義の尊者によつて奨励されることになつた振りを、理論的なマルクス主義的人間主義者にしたてあげたのと同様に、自

山への突進は、アフリカの革命家たちを活動的なマルクス主義的人間主義者にしたてあげた。ほかの諸国のマルクス主義的人間主義者たちは、諸君の耳に耳を傾け、諸君の助力によつて、国家の統制から解放され、世界の再編を願いつつ新しいインターナショナルを建設しようともちかまえている。

3777

今日におけるマルクスの人間主義

附：疎外の理論—マルクスがヘーゲルに負うところのもの

ラーヤ・ドナエフスカヤ

三 浦 正 夫 訳

訳者はしき

このパンフレットは、『海外と革命』の著者で、アメリカにおける「マルクス主義的人間主義者」と称する反帝国主義・反スターリン主義の立場に立つ革命的マルクス主義者団体の理論的ないし実践的指導者ラーヤ・ドナユフスカヤ女史が書いた最近の哲学論文をまとめたものである。

前述の要領をうけてここに訳出したオ一論文「今日におけるマルクスの人間主義」はアメリカにおける新フロイド派の左翼にぞくするエリツヒ・フロム教授（彼にはラーヤの本論文の脚註の中にのべられているように「マルクスの人間概念」の著書があり、その附録にT・B・ボットモア教授の訳した『経済学哲学草稿』の全文が、「ドイツ・イデオロギー」『ヘーゲル法律哲学批判学説』などとともに収められている。）の編者にかゝる最近出版されることを予定されている新著にラーヤ女史が寄稿した論文で、最新のデータをもとにして、彼女がその主旨『海外と革命』に見事に展開したマルクス主義的人間主義者の基本的な主張を短くスペースのなかにならわめてあざやかにまとめあげている。

オ一の論文「海外と革命」は、彼女たちがやっている

はラーヤ女史の論文に引用された英文によつて、マルクスの原文（英文）から訳出された邦訳文と若干ちがつてゐることをこゝにお断りしておきたい。

一九六五年十月十八日 三浦 正夫

「ニューズ・アンド・シテーズ」から今年の七月にだされたパンフレット「フリー・スピーチ運動と黒人解放」の附録の一文であり、彼女がアメリカ各地の大学生や公民権運動に参加した労働者たちに招かれて行つた講演の要約である。

いずれも、ラーヤ女史の主張してやまないマルクス主義的人間主義の本質を理解するためにきわめて有益だと感じるので、女史の同志的善意のもとに、いまこれをパンフレットとして読者諸君のお手もとにおとどける次第である。ラーヤ女史もオ一論文のなかで主張しているように、マルクスの『資本論』の論理構成の基礎におかれているのは、改がヘーゲルの否定の辯証法だといつて『経済学哲学草稿』のなかで展開した海外論の哲学であり、彼女の解釈によれば、マルクスにあつては哲学と経済学と——同時に政治つまり階級斗争の實踐とは人間主義を軸としてとくはなちがく有機的に結びつてゐる。故に私たちは、このパンフレットがまさに長崎造船社からだされた『ソ連経済と価値法則』と併読されることを、そして、いづらか金ははるけれどさきに現代思想社からだされた彼女の著書『海外と革命』をもあわせよまれることを切望してやまない。

なお、訳文中大カソコ（……）にはさまれた部分は、主として引用文の邦訳のことと該当する箇所をあげて読者諸君の参考としたものだが、ほくたちのホンヤクはもつ

マルクスが『資本論』の多くの草稿を構成しておいて、オースターの初版と再版を公刊したのは、オースター・ナショナルが活動していた、一八六四年から七四年までの十年間だったが、この十年間はアメリカの南北戦争とパリ・コミューンが勃発した時期にあたっていた。

『資本論』は、理論に関する新しい考えを、つまり理論と実践の間の新しい弁証法的な関係をもちだし、歴史についての考えの重点を理論の歴史から生産の歴史へと移動させた。このことは、マルクスが、一〇年以上にわたって当時の経済学や階級斗争に関する経験的研究に努力を集中したのち、再び彼自身の哲学的人間主義に「補正した」と意味する。こうした彼の自身の哲学的人間主義への補正が、一だんと具体的な水準の上で行われ、マルクスの当初の人間主義的思考を薄めまいと、むしろこれを強化したということ、ならざるにあらざない。このことは「労働日」に関する節のなかにはつきりとみとめられる。つまり、マルクスは、アメリカで南北戦争が終った直後に書かれた、労働日短縮のための大衆運動に刺激されて、一八六六年になつてはじめてこの節を書こうと決心したのである。さらに、このことは「商品」の物性的性格」に関する節のなかにもハッキリとみとめられる。マルクスは、彼がパリ・コミューンのおとこの節に「新しい」変更を加えたことをわれわれに報告している。そればかりではない。このことは、彼が経済を分析するためにつくりだした独自の諸範疇や、彼がヘーゲ

ル弁証法を創造的に使用したことのなかにハッキリとみとめられる。人間主義は、マルクスのこの傑作（『資本論』）に、力と方向とをあたえている。ところが、たいていの西洋のマルクス主義の研究者たちは、いまだ有名になつたあの一八四四年の『経済学哲学草稿』と『資本論』の間の関係についてはこれを表面にださないで満足しているか、あるいは、この両者の連続性をハッキリとらだす場合でも、これをマルクス主義の論理的基礎に關する限りにとめて満足している。こうした態度は、哲学ならびに歴史的事実としてのマルクスの人間主義を、具体的な経済的搾取や政治的自由の現実的な欠陥や、マルクスの哲学の「実現」——つまり個々の個人の精神的能力と肉体的能力とを再び統一し、マルクスの人間主義の肉體であり魂である「全面的な活動能力をもつた」個人の出現——を阻止する条件を廃止する必要を説くか、一つの抽象に転化してしまふと、進む人のためにひろく扉をあけはなつもののように思われる。

一八四四年の『経済学哲学草稿』は、「科学的な社会主義」への「道を準備する」ものでは断じてなかつた。人間主義とは、マルクスが「科学的経済学」ないし「革命的な政治学」への充足への旅の途上で「通過した」一段階では断じてなかつた。人間主義の哲学とは、まさにマルクス理論という完全な統一の基礎そのものにはかならない。マルクスの理論は、「経済学」や「政治学」や「社会学」に区分されることはできない、ましてフ

ルシチヨフや毛沢東の手中にたたく限りつきつられていくようなスターリン主義的な一攷的の創造物と同一視されることはできない。

一八六七年にだされたオースター版から、マルクスが一八八三年に死去する前にだされた最後の版にいたるまで、『資本論』の一切の版のなかで、フランス版（一八七二—七五年）だけが、マルクスがあとがきで述べているように、「オリジナル版から独立した科学的な価値」をもつ変更をふくんでいた。「天を衝かん」という運命を自己の手中につかもうとするバリの大衆の革命的行動は、マルクスのために二つの最も基本的な理論上の問題をあきらかにした。すなわち、資本の蓄積と商品の物性的性格の問題である。マルクスによる労働日短縮闘争の分析が『資本論』の構造の中核になつたのと同様に、フランス版にみられたオリジナル版に追加された部分は、資本論の精神——つまり現在のなかにはまかれていた未来——の中核になつた。こうしたテキストの変更には二種類のものがあつた。そのひとつは、「ぼくたちが今日国家資本主義とよんでいるもの——つまり資本の集積と果中の法則が明確まで発展して「たゞ一人の資本家なり、たゞ一つの資本家社会なりの手に」固執すること——の予言にひとしいもの」だつた。さて、オースターの改訂は、価値形態に固有な商品の物性的性格をこの形態自身（四）から発生するものとして説明することだつた。マルクスは、ただ自由と連合した労働だけが価値法則を廃止することが

でき、たゞ「自由に連合している人間」と結論したのでつた。

此種の国家権力がマルクス主義を「実現している」とかマルクス主義を基礎としていふとか主張している、歴史上の現時点にあつては、マルクス自身が実現という言葉を何をいふとしたかを今一度ハッキリと確かめておくことが最も必要だ。が、それは自由というところだつたのだ。たえずマルクスの出発点でもあり帰着点でもあつた、自由という観念は、資本主義の発展の「冷厳な法則」に關する徹底的な苦心をほらつた独自の分析によつて具体化された。こうした分析は、いかにして「物性」（つまり搾取にもとづく社会のたんなる対象）としてのプロレタリアートが「主体」になるか、すなわちプロレタリアートが除外された労働の条件にたいして反逆し、せういた反逆によつて「否定的否定」を、つまり自己解放を達成するかというのをあきらかにしている。要するに、『資本論』は、一八四三年にマルクスがはじめてブルジョア社会と決別し、彼がブルジョア社会の思想上の最高の達成物だと考えたもの——つまりイギリスの古典経済学とフランスの承継理論とヘーゲル哲学とを、解放の理論、すなわち彼が「完成した自然主義もしくは人間主義」（坂本・田中訳『経済学哲学草稿』一三三頁）となつた、人間の活動についての新しい哲学に根立てたときに開始された、二五年にわたる研究の到達した最高点なのだ。

一九五六年のハンガリー革命は、マルクスの人間主義を、アカデミックな論争から、われわれにとつて生死にかゝる問題にかえた。マルクスの人間主義にたいする関心は、その翌年に中国できわめて短期にわたつて「百花齊放」が行われたとき、「そう強められたが、この全体主義国家は突然としてこの花をばらばらにさせた。四〇から一九五八年から一九六一年までにはわたつて、アメリカ各国の革命が新しい才三の世界が成立したことを証明したが、この世界の基礎によつてつづいてる哲学も人間主義にはかななかつた。

一九四〇年代の中葉と一九五〇年代の初期には、西歐ではマルクスが一八四四年にいた人間主義に関する諸論文が再発見されたが、冷戦とマッカーシズムのため、アメリカはこうした消息からきりにはなされていた。ところが、いまでは、アメリカ人たちは、遅れて出発したために失われていたとの包括的な討論のなかでとりもどす機会を手に入れている。一方には、即時解放を要求する黒人の運動、他方には核戦争の脅威を現実のものとした一九六二年のキューバを襲つたミサイル危機、それらがこの討論を再燃させることを助けたのだ。一人の学者も、たしかに彼独自の方法で、マルクスの経済学的範疇と政治学的範疇と社会学的範疇と、科学的範疇と哲学的範疇との内面的な同一性を把握したにちがいない。その学者とは、非マルクスの・非ヘーゲルの経済学者、故ヨゼフ・シュムペーターなので、彼はマルクスの天才

はまさに「理論に関する天才」に、つまり「歴史的な叙述を歴史的な習性」に転化させた点にあると指摘したのである。

ほかのところで、曰わしたは「資本論」全四巻（『剰余価値学説史』をふくめる）ならびに、それらと一八四四年の『経済学哲学草稿』との関係とを詳細に分析してゐた。ここではスペースの関係で考慮して、わたしは、わたしの叙述をこの基本的な理論に制限せざるをえない。すなわち、マルクスによる価値と商品の物性的性格の分析のなかで、この二つの理論は、実際上は、たゞひとつの決定的な、統一された、種々の理論、あるいは弁証法的に理解された史的唯物論の理論なのだ。

「人間の意識がその存在を決定するだけではなく、反対に人間の社会的存在が彼らの意識を決定するのだ」といふマルクスの発見は、彼自身の疎外された労働に関する理論、もしくはヘーゲル弁証法の中核としての疎外論から決してずれてはいなかつた。だが、資本主義下の現実の労働過程にたいするマルクスの正確な分析は、ヘーゲルの『精神現象学』のなかのべられていた疎外のどの段階よりも一だんと具体的であり、生き生きとしており、破壊的であり、そしてもちろん一だんと革命的だ。全くヘーゲルのな型にしがたつて、マルクスは創造性に焦点をあててゐる。だが、ヘーゲルとはちがつて、彼はこの創造性を現実の生産過程にとづけてゐる。ここで、マルクスは、たんなる観念ではなく観念をい

人間を直視して、彼が初期にいた、労働者の「普遍性に対する要求」といふ考えを発展させている。彼がいまやとめる「新しい情熱と新しい力」（『向坂訳「資本論」四三三七頁）は、たんに旧秩序を破壊させるためばかりではなく、新しい秩序——つまり「各個人の完全で自由な発展を根本原理とする社会」——を建設するに生ずるのだ。

「資本論」のなかでは経済学上の概念と政治学上の概念と哲学上の概念とは、緊密に有機的に関連させられてゐるので、一九四三年にロンソアの理論家達をはじめて価値に関するマルクスの分析から公然と決裂したとき、彼らが「資本論」の弁証法的な構造をも否定して、「資本論」を「教授する」場合には第一章を除去せよと要求せねばならなかつた。「資本論」は「西歐の」哲学については何を大きくして語つてはいないので、彼らはこうした経済学上の論争のなかに哲学的な意味がふくまれていることを見よとしなかつた。だが、彼らは、マルクスの弁証法的な哲学の伝統を継承してきたソヴェト・マルクス主義の理論機関誌（『マルクス主義の旗のもとに』）がなぜその発行を停止したかという理由を知ることができなかったのだ。その後、たちつた混乱をひきかこすこともなく、またマルクス経済学に関する旧来の解釈にたづねられることもなく、マルクスの価値に関する分析の修正は標準的な共産主義者の分析になつてしまつたのだ。マルクス理論の全体は、それからひらいた

ず既製のマルクス主義にとつては厄介千万な「毒手」だつた。一九四四年末にレーニンがマルクス経済学とヘーゲル哲学との有機的な結びつきを十分に把握するためには、オニン・ナショナルが開始し彼が彼自身の哲学的過去と決別することが必要だつた。

そして、このときいらい、レーニンは、彼自身をもふくめた一切のマルクス主義者を批判するにさいして非妥協的な態度をとるようになった。彼のアフォーリズムのひとつのなかで、彼はつぎのように書いた。「もし諸君がヘーゲルの『論理学』の全体を研究しこれを理解しないならば、マルクスの『資本論』——とくにその第一章を十分に把握することはできない。だから、過去半世紀にわたつてマルクス主義者たちは誰一人としてマルクスを理解しなかつたのだ」（『レーニン「哲学ノート」』第一章 松村訳 岩波文庫一五七頁）

「商品の物性的性格」と題された「資本論」第一章の終節よりも注目すべき分析ををくもくみている文章は、経済学の歴史のなかにみられないし、またマルクスの「ヘーゲルの影響下にあつた初期」にもこの文章よりもヘーゲル的な文章はない。そこ「『資本論』第一章終節」では、哲学と経済学とは、偉大な文学作品のなかで内容と形式とがひとつに統一されているように、歴史と密接に結びつけられている。マルクスがパリ・コミューンの後フランス版に「そうたちいつた変更を加えたとき、こうして附加された一五頁はバイオリンの糸のようにかた

くひきめられていた。われわれは、マルクスが、コミューンの最大の達成はそれが「自ら活動する行動体」(「木下訳『フランスの内乱』岩波文庫九五頁)だつたとだと考えていたことを記憶にとめておかなければならぬ。コミューン戦士によつて行われた社会再組織の全面性は、マルクスに、価値形態の問題全体への新たな洞察をあたらせた。なぜなら価値形態は歴史的に決定されていたばかりでなくさらにブルジョア思想をも制約したからだ。資本主義的な生産の条件のもとでは、哲学はイデオロギーに——つまり意識の意識に墮落させられてきた。資本主義的な生産によつて適切な思想の諸範疇は、アダム・スミスやリカード、つまり労働は一切の価値の源泉だといふ両面的な発見をなしとげた著者たちをもふくめた一切の人々によつて、無批判的に受け入れられた。このことが、彼らがなせ、右のような発見を行つたにもかゝらず、商品の物神性を解消することができなかったという理由なのだ。古典経済学はこゝでその歴史的な障害にぶつかつた、とマルクスは結論している。

労働生産物の商品形態は、主体の客体でない——つまり生きながら死んだ資本にたいする従属された関係のため、物神性になつたのだ。人間の間の関係は物の関係としてあらわれる。なぜなら、われわれの疎外された社会ではこのことこそが、「あるがまゝの私的労働者の間の関係」(同の巻のなかから)死んだ資本が生きた労働の主人なのだ。商品の物神性は、ヘーゲルの表現を

3781

「彼らはこの言葉によつて労働を意味した」——について語つたとき、マルクスは辛辣にかいた。「彼らにとつては、かつては歴史が存在した。だが、現在ではもはや歴史は存在しない」(「高木佑一訳『哲学の貧困』前掲書一六六頁)と。

マルクスの価値、もしくは「抽象的」な、「価値を生産する」労働に関する最も大切な理論が疎外された労働の理論であることは明瞭だ。人間主義的な諸論文のなかで、マルクスは、一体なぜ彼が「疎外された労働」という概念をもちいて「経済学的事実を分析したかを説明した。『……われわれは尋ねよう。人間が自分の労働を疎外するといふことが一体どのようにしておこるのか? 一体どのようにして、こうした疎外が人間の発展の本質のうちに基礎づけられるのか?』と、われわれは、私有財産の起源に関する問題を、疎外された労働と人間の発展行程との関係という問題におきかえることによつて、この問題を解決するために多くのことをなしとげてきた。なぜなら、私有財産によつて過る場合、ひとと人間の外部にある事物を取扱つていふと信じているからだ。だが、労働によつて過る場合には、ひとと直接に人間自身を取扱つていふ。問題をこのように新しく定式化することのなかには、それ自身すでにその解決がふくまれている。」(同)

だが、「資本論」を完成したとき、マルクスは、工場における活動ならびに「自由と平等と財産とペンタム」が支配する「自由市場における商品としての資本主義下の労働の、疎外された性格を分析するための経済学上の諸範疇をつくる必要を感じていた。

マルクスは、たんに価値ならびに剰余価値の理論を説明するばかりでなく、どうして疎外した人間関係が生産点に存在するかを示すために、特殊な経済的諸範疇をつくりだしたのだ。あたかも労働者が彼の両手を身体から引きはなしてしかも手の動きをつゞけさせることができるかのように、労働という範疇をば活動としての労働と商品としての労働力に分けることによつて、マルクスは、労働力はそのように身体から引きはなされることではないから、工場へ入つてゆくのは労働者自身だといふことを示すことができたのだ。そして、マルクスのつゞけてのべるところによると工場の中だけでは、労働者の能力は機械のたんなる付属品になり、彼の具体的労働は変換された抽象労働の集団に帰せられるのだ。

ところで、もちろん、「抽象労働者」なんていう生きものはどこにもない。いるものはあるいは炭鉱夫や立工や鉄鋼労働者やパン焼労働者なのだ。それにもかゝらず、資本主義生産はゆがんだ性質をもっているのだ。そこでは人間が機械の主人ではなく、機械が人間の主人なのだ。工場の中の大時計が時をささむテックナックといふ動きのなかで「表現される」機械を媒介とすることによつて、彼が一定の時間内に一定量の生産物を生産するかぎり、人間の熟練は重要ではなくなる。労働時間

は、一切の具体的労働を一つの抽象的な集團に、奇妙に転化せしめよう機械の侍女なのだ。

マルクスは、彼がこゝからみた具体的労働と抽象的労働との分析を、彼が経済学にたいしてつくった独自の貢献であり、「経済学の明確な理解がそれをめぐって施される中軸」(四)だと考えた。資本家の「剰余労働にたいする人狼のような渴望」(向坂訳「資本論」(二))を「多量な自己を増殖する生息する怪物」(五)として分析してゆく過程で、マルクスは、他に二つの新しい範疇をつくりだした。一つは「不変資本(機械)と可変資本(賃労働)」とである。彼の主張するところによると、支払われようとして支払われまいと、一切の労働は強制された労働であり、こうした労働は、ひどく疎外された活動なので、それはそれ自身資本の一形態になつてしまつてゐる。

疎外された労働についての右のような叙述の正確さと独自性とは、もちろん、たんに「演説的なヘーゲル弁証法」の範疇ではない。それは、全く新しい真理の水準を再びつくりだした。マルクスの弁証法的な経験主義の範疇なのだ。マルクスによつて資本主義下の労働過程に關してかゝれた見をおつてよんでゆくと、成熟したマルクスは疎外された労働に關する彼の理論からはなれ去つたとか、疎外された労働とは、彼が「ヘーゲルのナゾのような言葉」を借りひらいて「科学的唯物論」へのみちを前進する以前に、マルクスが「あとに引いたヘーゲル時代」から「残りのもの」だとかいつた結論をたすことがで

きるのは、政治的な動機にとらえられ、自己防衛にかゝつた盲人だけだ。これと同時に、マルクスの経済学上の諸範疇が階級的な性格をもつてゐることは異論の余地はないから、こうした諸範疇からその階級的な内容を剥きとることはできない。今日のマルクス主義にちかひ入るの一部は、こうした範疇の「中立性」を高く主張してゐるけれど、彼らは実際はこうした範疇を、資本主義に、そして資本主義だけに適用してゐる。マルクスの価値法則は資本主義の最高の表現なのだから、スターリンですら、一少くとも彼がすでに全国家権力と国家経済計画と一枚岩的な党をその手に握つたのちほど二〇年の間は、一価値法則がソ連で作用してゐることをみとめようとしなかつた。

なぜなら、彼は、ソ連は「社会主義國家」だと宣言したからだ。ソ連の理論家たちが公然とマルクスの概念と決裂したのは、よりやく第二次大戦のさなかのことだ。きなかつた。もちろん、寒戦上では、支配的官僚たちはこれよりスツと以前から搾取のコースをたどつてはいたのだ。

一九四七年に、アンドレー・ジネディフは、全く劇的に(あるいは少くとも大声で)、「哲学に携る人々」が「ヘーゲルの弁証法を批判と自己批判という『新しい弁証法』によつておきかえることを要求した。一九五五年には、マルクス主義の概念にたいする批判は、彼ら人間主義にまで及んだ。すなわち、レ・A・カルブリンは、

「一八四四年の経済学哲学草稿における、マルクスの唯物弁証法の仕上げ」なる論文のなかでつぎのように書いた。「マルクスは、哲学の限界をこえて、み、プロレタリアートの実際の生活と実際の必要の見地から、現実の世界を認識しこれを革命的に変革する真に科学的な方法としての哲学の根本問題を分析した最初の哲学者だつた。」(三)

だが、ソ連の共産主義者たちは、それが彼らの没落を意味するところでは、「革命的な変革」に好意を示さずとはしなかつた。それゆゑ、その翌年にハンガリー革命が、哲学を表現することによつて、一つはソ連共産主義からの解放を実現することによつて現実を変革しようとしたとき、論争は機関銃の銃火のなかにおわりをつけた。こうして、マルクス理論のロゴフ(論座)の破壊につづいて自由自身の破壊が行われたのだ。

その後たちちに、ソ連の理論家たちは、既製の共産主義にたいする一切の反対者にたいして、無限に烈しい攻撃を開始し、これらの反対者に、理由もなく、「修正主義者」というレッテルをはつた。ところが、彼らによつて不幸なことは、非常に多くの西欧の学者たちは、このレッテルをうけられ、支配的な共産主義者たちと「修正主義者」となつた。もつとも、こうした支配的な共産主義者たちは、第二次大戦の前夜にはヒトラー・スターリンの協定や毛沢東と蔣介石の間の統一戦線、そしてもつと最近になつてからはソノ分裂などといつたひどい大

始原や「柔軟性」を示したのだが、これと同時に、レーニンの哲学的遺産の二重性——つまり粗雑な唯物論にもとづく「唯物論と経験批判論」と「哲学ノート」の創造的な弁証法の間の二重性のなかにあつた一粒の真相は、もともと「西欧」にみられた反レーニン主義にとつて収束の目をもたらしした。ほかのところでは、固執した「マルクス主義にたいする独自の奇異」をしたと考えられてゐる「毛沢東思想」を、よくに彼の「東歐論」と「矛盾論」とを分析した。この両者は彼が権力者の地位にのし上つたことに關連するからだ。さて、こゝでわたしは、わたしの叙述をつぎの事実と制限せねばならない。すなわち、人間主義に關する論争には、一方では純粋にアカデミックな問題になる危険があると同時に、他方では「修正主義」に關する「政治的」な論争からひきはなされる危険があるという事実だ。幸運なことには、マルクス主義は決してたんに事物のなかにあるものでもなければ、たんに國家権力だけによつて所有されてゐるものでもない。それは、社会を新しい出発点の上に再建しようとする労働者の毎日の生活のなかにあるのだ。

たんにアメリカにたいしてばかりでなく、ラテン・アメリカにたいしても(フィデル・カストロも最初彼の革命を「人間主義的」とよんだ)、西欧帝國主義からの解放は、人間主義の旗をひるがえした。そこで、ソ連共産主義の路線がかわつた。最初レーニン主義はどんな種類の人間主義化をも、「人間主義的社会主義」の支持者に

だ。疎外された労働は、私的であると国家的であるを
とわす、「組織されている」と「無政府である」とを
とわす、資本主義のなかでゆめめられていた一切のもの
の本質だつたから、マルクスは、一八四四年にこのみ
た彼の資本主義にたいする攻撃を、つぎの言葉でとした
のだつた。「共産主義はそのようなものとしては、決して
人間発展の到達目標ではなく、人間的な社会の形態で
はない」(『城塚・田中訳「経済学哲学草稿」一四八頁)
なお、こゝで用いられる共産主義の意味については、い
ろいろと解釈されているが、(たとえは城塚氏の訳注を
みよ)、少くともフリーヤ女史は、彼女の文脈から考えれ
ば、これをカペーやフリーエやオーエンやバブーフなど
の主張した平等主義的な理想で無思想な共産主義——す
なわち、私有財産の最初止物の段階と考えているようにだ
と。自由とは、私有財産の廃止よりも多くのことを、
はるかに多くのことを意味した。マルクスは、私有財産
の廃止を、たんに「最初の止揚」(『城塚・田中訳「経済
学哲学草稿」一三〇頁)にすぎぬものと考えた。完全な
自由は才二の止揚を要求した。こうした人間主義的な論
文がかゝれてから四年の後、マルクスはあの歴史的な論
「共産党宣言」を発表した。彼の基本的な哲学は、新し
い用法によつても決して変更されなかつた。反対
だ。一八四八年の革命の前夜に当つて、「共産党宣言」
はつぎのように主張した。「個人の自由は万人の自由の
基礎である」(大内・向坂訳、岩波文庫版「共産党宣言」

六九頁)と、こうした考えは死ぬまで変らなかつた。彼
の「自己目的」として行はしめる、人間の力の発展」
だけが真の「自由の王国」(同)であるという考えから決し
てはなれなかつた。こゝで再び、われわれの時代はほか
のいかなる時代よりもよりよく、私有財産の廃止はたんに
最初の止揚にすぎないという、若きマルクスの主張の
よりどころとする理由を理解すべきだ。「こうした媒介
——それは、それにもかゝらずひとつの必要の前進な
のだが——を止揚するまでは、自己自身から出発する環
境的な人間主義は生れない」(『城塚・田中訳「経済学
哲学草稿」二一六頁)
「積極的な人間主義」は、肉体労働と精神労働とがマ
ルクスが「全体的な」(『前掲訳書一三六頁)個人となつ
けるものゝなかに再び統一されるとはじめて「自己自
身から」出発する。たしかに現代の核時代に生きる人々
は、これまで一切の階級社会の基礎に横たわつてゐる原
則だつた肉体労働と精神労働の分裂が資本主義のもとで
きわめておそろべき程度に達したので、きびしい対立が
たんに生産ばかりでなく科学自身をも特徴づけているこ
とをヒシヒと感じているにちがいない。一八四四年に
マルクスが、「生活のためにひとつの基礎をもち、科学
のために別の基礎をもつ」ということはそもそのはじめ
からひとつの虚偽なのだ。(『城塚・田中訳「経済学草稿」
一四三頁)とかいたとき、彼は近代科学の狭小路を予期

よつて提起されるどんな改革をも必要としない」と主張さ
れていたが、いまではソグエートは戦間的な人間主義の
正しい継承者と主張されてきた。こうして、全ソ政治
的科学的知識普及協会事務局局長といういかめしい肩書
をもつてゐるM・B・ミーチンは、フルシチョフがロ
シア共産党二回大会で行つた報告は「マルクス・レ
ーニンの社会主義的人間主義に関する壮大で高貴な考
え」(同)だとのべた。そして一九六三年には、メキシコでひら
かれた才一三回国際哲学学会議の席上で、その報告のひと
つを「現代世界における人間主義」(同)と題したのは、ソ
グエトの代表団だつた。こうして、まことに奇妙なこと
には、西欧の知識人たちは、ボールを自分たちのところ
に投げかえしてくれたいと、つまり、われわれがいま一
度人間主義を論ずる軌道にのつたことについて、ソ連の
共産主義者たちに感謝することができるとだ。

われわれは、思想の自由をば、それが思想統制の貨幣
のいまひとつの面にすぎない点まで堕落させないでこ
うではないか。
「汝の敵を知れ」といつた研究タイプとしての、われ
われの制度化された「マルクス・レーニン主義」研究を
一瞥するならば、方法的には、こうした研究が、既製の
の共産主義のもとで教えられているものと少しもちがわ
ないことがわかる。もつとも、こうした研究は「反対の
原則」を教えていると考えられてはいるけれど、大切な
のはつぎの点だ。——もしも思想の自由が人類の前進を

実現するための哲学をその底に横たえていることを意味
しないならば、少くともヘーゲルの意味では、思想は
「理念」とよばれることができない。ヘーゲルにとつて
はまさに、たゞ自由の対象だけが理念とよばれるもの
だから、彼の場合には絶対的なものでさえ自由の地上的
な空気を呼吸していたのだ。われわれの時代も、これに
おとらず自由の地上的な空気を呼吸することができると。
マルクスの非証法が、たんに政治的な歴史にかゝる
ばかりでなく、認識にもかゝるものかというところは問
違ひない。だが、マルクスの階級闘争に関する考えがひ
とつの「神話」であり、プロレタリアートにたいする彼
の「讃美」が「疎外」に関する彼の哲学の終局的産物(同)
にすぎないことを主張することは、理論と事実が平手うちを
くわすことになる。この点で、こうしたアメリカ人の分
折は「共産主義の弊害」(同)にたいしてダレス氏がこゝろみだ毎
週の説教の知的相棒の一種(同)だというジョージ・リ
トハイムの批判はまったく正当だ。
マルクスの人間主義は、決して観念論をしりぞけるも
のでも、唯物論をうけいれるものでもなく、両者の真理
をあわせくむものであり、それゆゑ新しい統一なのだ。
マルクスの「共産主義」は、まさにその魂として、個
人主義的な要素をもつてゐる。これが、若きマルクスが
自分自身を人間の個性を全く否定する「全く粗野で無思
想な共産主義」(『城塚・田中訳「経済学哲学草稿」一二
七・一二八頁)から区別せねばならぬと感じた理由なの

していたのだ。われわれは二〇〇年にわたつてこうした虚偽を生きてきた。その結果、われわれが知つてゐる通りにまことに文明が生きてゐるかどうか問題になつてゐるのだ。

この論文の筆者にとつては、われわれの時代に直面している課題は、オーストリアは実践——つまり毎日の現実の闘争から理論への運動があることをみとめることであり、オーストリアは理論からの運動が実践に還元することが出来る方法をつくりだすことであるように思われる。理論の實踐にたいする新しい関係、「主体」つまり社会を再建するために闘つてある生きた人間を新しく評価すること、最も大切な。現代の挑戦は決して科学をいし機械にたいするものではなく、まさしく人間にたいするものだ。世界危機の全体性は、理論と実践の新しい統一を、労働者と知識人との新しい関係を要求している。全体的な哲学が探究されていることは、未開先導者からなる新たなオーストリアの世界によつて劇的にあらわにされた。だが、こうした探究が行われてゐる証は、全体主義的な政府からの解放のための闘いのなかにも、また西側のなかにもみとめられる。こうした巨大な全体的な哲学にたいする探究が行われてゐることを確認するためには、たゞすべての哲学のなかで最も頑固なもの——つまり「大衆の後進性」という考えをすてさつて、大衆がオーストリア・シヨーンと闘い、人種的差別を廃止するために闘ひ即時の解放を要求するとき、彼らの思想に耳を傾けることが必要だ。

知識を放棄することでは全くなく、これこそ認識の新しい段階の出発点なのだ。知識人の救済主義からの自己解放の、こうした新しい段階は、ヘーゲルがのべたように「具体的を真理へとむかつてすゝもうとする思想の衝動」を感じるときはじめて開始されることが出来るのだ。哲学的な原理としてのバルティノスト（究の原則）を採用することは、「大衆の後進性」というドグマのいまひとつの表現なのだ。こうしたドグマによつて国家資本主義社会の知識人たちは、大衆は命令によつてひきまわし、管理し、「指導」してやらなくてはならない、という議論を合理化している。西欧のイデオロギストと同様に、彼らはすべて、党機関を建設するためにはなく社会を人間の基礎の上に再建するために十分な機が熟さねば、革命は決して成功しないということを簡単に忘れてしまふ。政治における究の原則をいし一枚岩主義が、新たな数百万人の創造的なエネルギーを解放するかわりに、革命の息の根をとめるのとまったく同様、哲学における究の原則は、思想にたいして新しい領域をひらかないで、かえつてこれを窒息させてしまふ。こうしたことは、西にとつても東にとつても、決してアカデミックな問題ではない。マルクス主義は解放の理論でなければ、それは全く無にすぎない。生活のなかでと同様に、思想のなかでも、マルクス主義は新しい人間の領域を獲得するための基礎をすえるものだ。そして、こうした新しい人間領域をくしては、どんな社会でも本當に成長することは

できないのだ。マルクス主義者としてのわれわれにとつてこのことを哲学としてもまた現実としても、マルクス主義の真理のすべてであるように思われる。

註

〔マルクスの「資本論」(ケア版)の第二巻への序文のなかで、フリードリッヒ・エンゲルスは、もとの原稿を、これにつけた頁数をみれば彼がどのようにしてこれを構成しなおしたかが分るように表示した。この点についてのわたしの分析については「マルクス主義と自由」(ニューヨーク、イウエイヌ出版社、一九五八年、一九六四年)(邦訳「海外と革命」現代思潮社、一九六四年)の八七一九一頁をみていただきたい。

〔マルクスの一八四四年の草稿は、いまではモスクワでだされてゐるものをふくめ二、三の英語の翻訳でよむことができる。だが、アメリカで「そ」容易に入手できるのは、T・B・ボトモアによる翻訳で、これはエリッヒ・フロムの「マルクスの人間に関する考え」(ニューヨーク、フレデリック・ウングラー社、一九六一年)のなかに入つてゐる。だが、わたしは、「海外と革命」に關する論文以外、ここではわたし自身の翻訳をつかつてゐる。したがつて引用文に頁を指摘してい

ない。

〔三〕とくに、ユージニス・カメンカの「マルクス主義の倫理的基礎」(ニューヨーク、フレデリック・A・ブレイガー社、一九六二年)(「藤野夢談」岩波書店)参照。

〔四〕カール・マルクスの「フランスの内乱」(木下平治訳、岩波文庫版)は、パンフレットとしても、選集のなかでも全集のなかでも多数の箇所を広く入手できる。

〔五〕「資本論」(シカゴ、チャールズ・C・ケア社、一九〇六年)第一巻六八八頁(向坂訳「資本論」(四)一九九頁)。

〔六〕前掲書八二頁(向坂訳「資本論」(一)一三八頁)前掲書九二頁(向坂訳「資本論」(一)一五二頁)〔七〕英語のよめる訳者にとつて不可欠な本は、ロデリック・マック・フアークターの「百花斉放運動と中国知識人」(ニューヨーク、フレデリック・A・ブレイガー社、一九六〇年)だ。当時の中国における反抗の叫びは東欧のそれにも比較されるべきものだ。ハンガリー革命については、いまでは、パンフレットや論文にはふれないでも、実に多数の本がでてゐる。マルクスの人間主義が演じた役割をたどるために重要だと思われる本はつぎのとおりだ。「イムレ・ナジ、共産主義について」(ニューヨーク、フレデリック・A・ブレイガー社、一九五七年)、フエレン

「フ・フ・フ」(ハンガリー強奪の背後に) (ニュー
ヨーク、デヴィッド・マッケイ社、一九五七年) (同
じ著者が一九五六年に書いた「ハンガリーの悲劇は
『民族社会主義革命』ハンガリー悲劇の十年』の題
名で村松・橋本・清水訳(近代生活社)として邦訳
されている)。「ハンガリー革命白書」メルヴィン
J・ラスキ編(ニューヨーク、フレデリック・A・
ブレイカー社、一九五七年)、「辛い収穫」エドム
ント・O・ステイルマン編、フランソワ・ブロンデ
イ序(ニューヨーク、フレデリック・A・ブレイカ
ー社、一九五九年)。目撃者の報告、とくに労働者
評議会に関する報告としては、「レヴュー」誌(イ
ムレ・ナジ協会、ブラッセル)によつて定期的に発行
されている)の諸論文が最も重要だ。いくつかの報
告は「イースト・ヨーロッパ」誌にも載せられたが
この雑誌はとくにポーランドの指導的な哲学者ア
ダム・シヤフとレズエク・コワコウスキの間で行われ
たマルクス人間主義に関する論争を發表して、ポ
ーランドに對していい仕事をした。右の二人の哲
学者の論文は、レオポルド・ラベツツが編集した「修
正主義」(ニューヨーク、フレデリック・A・ブレ
イカー社、一九六二年)と題する論文集のなかに翻
訳されている。

(4) レオポルド・セダル・センゴール「アフリカの社会
主義」(ニューヨーク、アメリカ・アフリカ文化協

会、一九五九年)、セク・トーレの「歴史における
アフリカの道について」は、英語のよめる説者のた
めに「アフリカ・サウス」誌(一九六〇年、四月
六月号、ケイ・P・タウソ)上にその一部が載せられ
ている。これはいまだ外国でないと手に入らない
さらにわたしの「ナシヨナリズム・共産主義・マル
クス主義的人間主義ならびにアフリカ・アジア革命」
(アメリカ版一九五八年、イギリス版一九六一年の
両者はミシガン州デトロイト、ニュース・ブンド・
レターズ社で入手できる)。

出わたしは決して、アメリカがこの問題の研究につ
いてどの程度おこなっているか、あるいはアメリカで
の討論がどれほど低い水準にあるかといった点につ
いて西欧の知識人がとっている態度を承認している
とおうとしているのではない。ヨーロッパで最初に
マルクスの初期の論文が再発見された頃より即ち、五
年前、ヨーロッパがナチズムのかたよりに傾
けられていた時、ハーバート・マルクーゼは「理性と
革命」(耕田・中島・向來訳、岩波書店)のなかで
これらの論文を取扱った。この研究がこれらの論文
のドイツ語のテキストにもとづいていたこと、これ
らの論文の英語の翻訳が手に入らなかったこと、そ
してマルクーゼ教授のゼミナールの講義についての
論争が小さなグループに制限されていたことは事
実だ。そしてまた、わたしが、商業出版社や大学出版

部に、マルクスの人間主義に関する諸論文やレーニ
ンの「哲学ノート」(松村訳、岩波文庫)をぜひ出
版すべきだと説得するのに多大の困難を経験したこ
と、も事実だ。わたしは、この二つの論文を、わた
しの「マルクス主義と自由」(一九五八年) (対馬
・三浦訳「海外と革命」現代思潮社)への附録とし
て採録することによつて幸じて發表させることに成
功した。だが、当時でも、これらの論文は多数の読
者の手には入らなかった。マルクスの人間主義がア
メリカで多数の読者の手に入り、アメリカの雑誌や
新聞で広く注目されたのは、エリッヒ・フロムが彼
の「マルクスの人間概念」のなかにマルクスの一八
四四年の経済学草稿の翻訳を採録した一九六
一年以後のことだ。それにもかかわらず、わたし
はヨーロッパのマルクス学者の知的高慢さについて
真の理由を見ることができない。なぜなら、アメリカに
おいてと同様にヨーロッパにおいても、人間主義に
関する討論が具体的な水準、あるいは緊急な水準に達
したのには、ハンガリー革命以後のことになかなか
たからなかった。わたしが討論をおこなっていることによ
るとき、わたしは、一九二七年にソ連のマルクス・
エンゲルス研究所で一八四四年の草稿がリャゾノ
フの編集のもとで最初に發表されたときから、これら
の草稿が一般的な注意をあためた時までの間水い期
間をへたことを思ううかべているのだ。

(3) ヨゼフ・シュンペーター「経済分析の歴史」(オク
スフォード大学出版部、一九五四年) (東畑訳、岩
波書店)

(4) 「マルクス主義と自由」、とくに第五章から第八章
までを参照していただきたい。

(5) 「経済学批判への一寄与」(シカゴ、チャールズ・
H・カー社) 一頁(武田・達磨・大内・加藤訳
「経済学批判」岩波文庫三頁)

(6) 「哲学の貧困」(シカゴ、チャールズ・H・カー社)
一五七頁(高木佑一郎訳、国民文庫版一九二頁)

(7) 「資本論」(ケア版)第一巻六四九頁(向坂訳、岩
波文庫版(四)五四頁)

(8) 「マルクス主義の旗のもとに」第七八号、一九四
三年。この号の価値法則に関する主要な論文は、「ソ
連における経済学教授上の問題について」という
題名でわたしが翻訳した。この論文はわたしの批評
文「マルクス経済学の新修正」(長崎造船社研究刊
ソ連経済と価値法則)所収)をそえて、「アメリカ
ン・エコノミックス・レビュー」(一九四四年九月)
に発表された。同誌の誌上で行われたこの論文をめ
ぐる論争には、オスカー・ラング教授、レオン・ロ
ジン教授ならびにポール・A・バラン教授が参加し
たが、この論争は一年つづき、最後にわたしの回
答「マルクス主義の修正が再確認か?」(一九四五
年九月号) (長崎造船社研究刊「ソ連経済と価値法

期」所収」が発表された。

①「資本論」第一巻八四頁（向坂訳「資本論」（一）一四一頁）

②「客観性に対する第三の態度」に関するヘーゲルの言葉をよ。『わたしはわたしの意識のなかで発見するものは、こうして誇張して万人の意識の事実とされ、精神の性質そのものとして通用するにいたった。』（ヘーゲル『論理学』ワルラスの最初の翻訳、オクスフォード大学出版部、一八九二年）

③エリク・フロン『マルクスの人間概念』におさめられた「疎外された労働」、一〇三頁、一〇八頁、（東京・田中訳「経世草稿」一〇五頁）

④「資本論」第一巻一九五頁（向坂訳、岩波文庫版（二）六二頁）

⑤「前掲書」四八頁（向坂訳岩波文庫版（一）八三頁）

⑥「前掲書」一七頁（向坂訳岩波文庫版（二）九五頁）

⑦「哲学の諸問題」（論文）第三巻一九五五年

⑧「マルクス主義と自由」（ニューヨーク、トウエイン社、一九六四年）のペーパーバック版にのせた新しい一説「毛沢東の挑戦」を参照のこと。これと同様な、哲学におけるレーニンの党派性のスターリンの一枚岩的な「哲学の党的性格」への歪曲を分析したものである。十分に文献を参照した明快なデヴィッド・ヨラウスキーの分析、「ソグエスト・マルクシズムと自然科学」、一九七三年（ニュー

ヨーク・コロンビア大学出版部、一九六一年）を参照していただきたい。

⑨「ブラウダ」紙、一九五九年二月六日、ここで用いている英語の翻訳は、「ソ連新聞のカレント・アフェアーズ」一九五九年七月三日号にのせられている。

⑩M・B・ミーンズがこころみだこの会議の報告は「哲学の諸問題」（論文）一九五三年第一号にのせられている。この会議の他の報告については「ソグエスト思想研究」一九六三年第四号（フリブルグ、スイス）をみられたい。

⑪ロバート・タツカー「カール・マルクスにおける哲学と神話」（ケンブリッジ大学出版部、一九六一年）

⑫ジョージ・リヒトハイム「西欧のマルクス文庫」、一九五三年三月は、「サーグウェイ」第五〇号

一九六四年一月にのせられた。

⑬「資本論」第三巻、九五四―九五五頁（向坂訳「資本論」（二）三四七頁）

3786

疎外の理論

―マルクスがヘーゲルに負うところのもの―

「マルクスがどれだけヘーゲルに負うところがあるか」という問題は、決してたんにアカデミックなものではないし、またマルクスの生涯という歴史的時期だけに限するものでもない。ハンガリー革命からアフリカ革命にいたるまで、日本における学生デモストレーションからアメリカの黒人革命にいたるまで、自由のための闘いは現実を革新し、ヘーゲル弁証法を大学の講堂や哲学の書物から、歴史の生きた段階にまでひきだした。

こうしたヘーゲルの現代的なもののへび化が、マルクスを通じて行われたということには間違いない。だが、ソ連の共産主義のマルクスにたいする攻撃がヘーゲルを通じて行われたことも、同様に間違いない。ソ連の共産主義者たちは、いわゆる神秘的な絶対者のなかに「否定の否定」つまり彼ら自身にたいする革命をみとめたの

たから、ヘーゲルは依然として今日でもソ連の支配者たちにとつてはきわめて生き生きと生きており何ともうまい存在になっている。一九四七年にジュダノフが、ソ連の哲学者たちに「新しい弁証法」を発見するように要求してはいらい、いやむしろ「彼が批判と自己批判」こそが矛盾を通ずる発展というヘーゲルの客観的な法則におさかえるべき彼のいわゆる新しい弁証法だと宣言してはいらい、ソ連共産党第二回大会でよく哲学分科会がフルシチョフを「真の人間主義者」だと宣言するまでは、若きマルクスと神秘的なヘーゲルの二人にたいする攻撃はひきつづいて行われていた。こうした攻撃は、理論の上では、一九五五年にマルクスの初期の諸論文にたいする攻撃のなかで最高峰に達した。現実の上では、こうした攻撃は、ハンガリー革命をたたきつづすために結ばれた中ソ協定としてあらわれたのだ。

（註）中ソ論争が公開されたとき、中国共産主義者は実にさきに、彼らがフルシチョフにすすめてハンガリーにたいする反革命的な介入をさせたという事実を高唱した。

こうした知識人出身の官僚主義者たちはたまたひとつのことを正しく感じている。つまり、ヘーゲルの絶対的なものについての考えと、自由のための闘争的な闘争とは、表面にみられるように、遠くはなれはなれになつてゐるのでは決してないということ。

「観念的なものと実在的なものとは決して遠くはなればなれになつてはいない」

マルクスがヘーゲルから手に入れたものは右にのべた命題なのだ。若きマルクスがひとたびブルジョア社会から訣別したとき、同時に彼をして当時の粗野な共産主義者たちから訣別することを可能にさせたものも、まさに右にのべた命題なのだ。ところで、当時の粗野な共産主義者たちは、ひとつの否定—すなわち私有財産の否定は旧社会の一切の弊害を廃止して、そして新しい共同体的な社会が生れるだろうと考えたのだ。

マルクスは、ヘーゲル哲学の中核であるもの、つまり、疎外の理論を主張し、この理論から、もしもブルジョア社会における最大の疎外—すなわち人間の労働が疎外されて自己発展の活動から機械の部品に化し、そして労働が廃止されぬ限りは、人間の疎外は私有財産を廃止しても決してなくなるものではないと主張した。マルクスは、労働の疎外のかわりに、決して新しい財産形態をおかず、「個人の完全な自由な発展」(『ドイツ・イデオロギー』古在武、岩波版一五頁、「共産党宣言」大内、向坂六九頁、その他)をおいたのだ。

ヘーゲルのなかの多岐的なもの、天上にあつて人間とひきはなされたもの、そしてではなく人間存在の領域と

して、「絶対的なもの」を完全に把握する、人間の無限の能力をヘーゲルが前提したことは、人類がアリストテレスの絶対的なものからどれだけ水い行程を旅しつづけてきたかをあらかにしている。

アリストテレスは奴隷制にもとづく社会に生活していたので、彼の絶対的なものは「純粋な形式」におわつた。人間の精神は神の精神にであり、事物がいかに驚異的であるかを驚嘆するだろう。

だが、ヘーゲルの絶対的なものは、最良制を廃止したフランス革命から出発したので、彼の絶対的なものは空気を—地上の自由の空気を呼吸していた。たとえひとが絶対精神のなかに神をよみとるとしても、彼は理論と実践の統一の地上的な性質からのがれることはできないし、彼は、人間が全体的な自由—内面的であるとともに外面的でしかも現時点における自由—の達成物として絶対的な実在性を追求するのである。ヘーゲルがのべたように自己の努力によつて「自己自身の精神」を獲得した奴隷は「即自的意識」と「向自的意識」の間の闘争の一部となる。あるいは、もつと分りやすくなるならば、疎外にたいする闘争は自由の獲得となるのだ。

ヘーゲルの絶対的なものなかに、抽象的な形態をとつてはいるけれど、マルクスなら社会的個人となつてただろうと思われるものと、ヘーゲルが「普遍性」に介入して一切のものを解放された「個性」になつたもの、—つまり自由自身の完全な発展が包摂されている。

ヘーゲルにとつては、自由は決してたんに彼の出发点ではなく彼の帰着点だつた。このことが彼をこれほど現代的にしているのだ。このことは、たんにマルクスへの架け橋ばかりではなく、現代への架け橋だつた。そしてこの架け橋はヘーゲル自身によつて架けられたものだ。

レーニンが、第一次大戦中ヘーゲルをよんで「レーニンは一九一四年から一六年までの間スイス亡命中ヘーゲルの『論理学』や『哲学史』を精読し、たんに『ノイット』をつつた。その一部は『哲学ノート』として発表されている」マルクスの哲学的基礎にかつたとき発見することになつたように、非証法の革命的な精神とはマルクスによつてヘーゲルに附加されたものではなかつた。それはヘーゲルのなかにあるのだ。

二 マルクスのヘーゲル弁証法批判と彼のヘーゲル弁証法

マルクス哲学とヘーゲル哲学の本質をうはいさうとしたのは、ひとり共産主義者ばかりではない。学者たちも同様で、マルクスはきわめて奇妙なヘーゲルの弟子なので、ヘーゲルの弁証法をすつかり歪曲したとはいわないまでも、これを否認する点までかえてしまつたと思えてくる。われわれがヘーバート・メルヴィルが「認識の衝動」となつたものにこの議論の終りのところで、出会うかどうかはのちに分ることだが、これ(いわゆる認

識の衝動)はマルクスのなかにハッキリとみとめられる。

マルクスの精神的発展には、ヘーゲルの内在性とこれの止揚という二つの基本的な段階があらにみとめられる。ヘーゲルの内在性は、彼が青年ヘーゲル学派と訣別した時期を通じて行われ、彼は青年ヘーゲル学派の人たちに、彼らが理念を非人間化しつづけているという非難をなげかけた。それは、ちょうど、彼が「ヘーゲル法律哲学批判」(『マル・エン選集』(大月書店版)初巻(四)所収)や「ヘーゲル弁証法批判」(正確には「ヘーゲル弁証法と哲学一般とその批判」、『経済学哲学草稿』(岩波文庫版)所収)の二つをかけた時期だつた。マルクスの新しい唯物論的な見解には、なんら機械的なものはなかつた。社会的な存在は意識を決定する。だが、社会的存在は、ひとが新しい社会の諸要素を感じることを、ましてやこれを見ることを阻止するしきり壁では決してない。

ヘーゲルの場合でも、過去と現在との間の関係としてばかりでなく、将来が現在に及ぼす牽引力、ないし全体が—たとえそれがまだ存在しないときでさえ—部分に及ぼす牽引力としての機械性が弁証法の主要な要素なのだ。弁証法は、青年マルクスに、物質的な土台とは彼が「粗野」だとなつたものではなく、反対に、それは世界の改造に努力をかたむけている主体を解放するものだという事実を見とけていたうちに、彼がプロレタリア

トの世界意識の新しい段階をうちたててをたすけたのだ。

マルクスは、彼が学問の上で、古典経済学や古典哲学のお世話になつてゐることを忘れるような人物ではなかつた。彼は、この両者を、当時の現実の闘争のなかにしっかりと根ざされてゐた新しい世界観にかえたのだけれど、こうした世界観の根源は、スミスとリカードとの価値論でありヘーゲルの弁証法だつた。もちろん、マルクスは、ヘーゲルが客観的な歴史を、それがなんらかの世界精神の発展であるかのようにとりあつかひ、あたかも概念が天地の間のどこかに浮遊してゐり、あたかも頭脳が一定の環境のなかで特定の歴史的時期に生活してゐる人間の肉體の一部であるかにはないもののように、精神の自己発展を分析した点で、ヘーゲルをきびしく批判した。まことにヘーゲル自身は、もしわれわれが彼が生きた歴史的時代つまりフランス革命とナポレオンの時代をたえず思い浮かべてゐないならば、分りにくいだろう。そして、彼の用いた言葉はどんなに抽象的でも、彼は人間の歴史の脈搏に指をあてがつてゐたのだつた。

マルクスの「ヘーゲル弁証法批判」は、同時に、フョイエルバッハをもふくめたヘーゲルの唯物論的な批判者に対する批判なのだ。そして、フョイエルバッハは、「否定の否定を哲学の自己自身との矛盾としてしか」論じなかつたのだ。

これに反して、マルクスは、抽象的な形態ではあつたが、弁証法の原理が歴史自身の運動の表現だということをおきらかにしている。

マルクスは、ちょうど彼が絶対精神に到達したときにヘーゲル弁証法の批判を完成した。いや、むしろヘーゲル弁証法の批判からはなれた。マルクスによる絶対精神の再発見は、資本主義下の階級闘争の具体的な発展から生じた。そして、資本主義下の階級闘争はこの絶対的なものをつぎの二つに分裂させた。

「マルクスが資本主義発展の「絶対的な法則」」「（『資本論』（四）岩波文庫版、一四八頁）となつた失業者の軍隊——すなわち産業予備軍。これは資本主義の崩壊をもたらす否定的な要素だつた。

二「新しい力と情熱」（『前掲訳書三四七頁』）——これは労働者を旧社会の「暴徒人」（『共産党宣言』岩波文庫版五六頁）で新社会の創造者とする、否定のなかの肯定的要素だつた。

三、人間の領域

人間の領域を解放する、全体的に新しい基礎の上に社会を確立するさいに、労働者の新たな創造的な活動に際する思想上の飛躍をなしとげることができたのだ。

もちろん、ヘーゲルは思想のなかでは一切の矛盾を解決したが、生活のなかではそうした矛盾がそのまま維持され倍化され強化されたことは間違いない。もちろん、階級闘争が矛盾を解消しなかつたところでは、こうした矛盾はたんに経済ばかりでなく経済理論家たちをもくろしめた。もちろん、マルクスがかいたように、最初の資本主義的恐慌（第一回の一般恐慌は一八二五年におこつた。エンゲルス「空想から科学へ」岩波文庫版五七六頁）がはじまるとともに、経済理論家たちは「資本主義の歴史の手」（『資本論』（二）岩波文庫版一四四頁）になつた。

だが、なによりもまず、マルクスは、イデオロギーと経済とを、あたかも後者のみが基本的なもので、前者はたんに「見せ物」にすぎないもののように、決して分離しなかつた。マルクスは、両者がともに生活のうちに現実的であると主張している。彼の最大の理論的労作「資本論」の全巻を通じて、彼は「商品の物神性」を手きひしく批判する。なぜなら、たんに生産点における人間の関係が「もの」としてあらわれるばかりでなく、

とくに、資本主義下の人間関係はひどく歪められてゐるので、右のようなことはたんに現象ではなく、まさに人間関係の現実の姿であるからだ。つまりそこでは機械が人間の主人で、人間が機械の主人ではないのだ。

マルクスの鋭く主要な点は、弁証法の人をかりたてて力に、人間の思想ではなく人間自身だということ。しかも生産点における疎外された労働者とはじまる人間の全体だということであり、さらに、ブルジョア階級の理論家たちは、現状をまもり「商品の物神性」の奴隷であるため、彼らが生産のなかにおかれてゐる地位のために、虚偽の意識をもつが、他方プロレタリアは、生産のなかにおかれてゐる地位のために、矛盾の解決にむかつてすむ「否定的な原理」であるということだ。

「歴史哲学」のなかで、ヘーゲルはかつて、「人間が自由を獲得するのは、奴隷制からではなく、奴隷制を通じてだ」とがいた。こゝでも、われわれは、「実践」とはマルクスが発見したものでなくヘーゲルが発見したものだといふことが分る。マルクスがやつたことは、実践をプロレタリアートの階級闘争の活動として規定することだつた。ヘーゲルの理論のなかでも、実践は「認識」という理念よりも高い地位にたつてゐる。なぜなら、それは「たんに宇宙の威厳をもつばかりでなく単純に実在的なものだから」。

ヘーゲル自身が、彼の哲学を附随された存在論的な体系として論ずることによつて、これも神秘的なヴェール

でおおつたことは間違いない。だが、われわれが、彼の絶対的なものは哲学者と物質的生産の世界との分離を反映するものにすぎないとか、あるいは彼の絶対的なものは、フイヒチからヤコビを通じてシェリングにいたる主観的な観念論者の精神な、あるいは知的な直観という空虚な絶対者だと考へるなら、それはヘーゲル哲学の完全な誤解だろう。ところで、右のべた主観的観念論者たちの主張に共通する主観と客観の統一の型は、ペーリ教授がさわめて美事にのべたように「節度のなさ」を犠牲にして客観性を占有する」ことだつた。

ヘーゲルの場合のように、出発点としてキリスト教がとられようが、マルクスの場合のように産業革命によつてつくられた自由のための物質的な条件がとられようが、本質的要素はおのずからあきらかだ。つまり、それは、人間は自由を獲得するためには闘わねばならぬ、近代社会の「否定的な性格」はこうした闘争によつてパクロされるということだ。

さて、否定的原理はマルクスが発見したものでなかつた。彼はたんにこれに「生きた労働者」という名前をつけたにすぎぬ。この原理を発見したのはヘーゲルだ。自然界において、精神自身は、それがもはや世界にたいして対立的ではなく、まさに共同体の内面に存する精神だということを見出す。ヘーゲルが初期の著作のなかでのべたように、「絶対的な道徳的全体性は人民がいかなるものでもない。……（そして）自然の原理という要

素をうけとる人民は、それを適用する使命をもつてゐる」ヘーゲルの人間主義は、あの最も複雑な哲学の特徴として最も明瞭ではないかもしれない。そして、部分的には、それはマルクスからもかくされてゐた。だが、レーニンがかつて、観念論を「主観性あるいは自由の園」(「レーニン「哲学ノート」第一分冊、松村沢波文庫版「三六頁」)として簡潔に叙述したさいにさえ、それをとらえていた。いかえらるならば、人間は、「所有」としてではなく彼の存在の領域として自由を獲得するのである。

マルクスが、プロレタリアートの歴史的闘争のなかでみとめたのはこうした人間の創性的領域だ。こうした闘争は、断乎として一切の階級分業を廃止するとともに、人間は階級社会ではひどく疎外され、精神労働と肉体労働との分裂によつてひどく堕落させられてゐるので、たんに労働者が機械の付属物にされてゐるばかりでなく、科学者もまた社会を地獄のはしに落ちく原理にもとづいて建設してゐるのだが、まさにのべたプロレタリアートの闘争はこうした疎外され堕落させられた人間のもつてゐる広汎な可能性を開放するのである。

広島に原爆が投下される百年前、マルクスはつぎのようにかいた。「生活のためにひとつの基礎をもち、科学のために別の基礎をもつ」ということはそもそものはじめから一つの虚偽なのだ」(坂塚・田中訳「経済学哲学草稿」一四三頁)と。われわれは、こうした虚偽をこんなにも

水く生きてきたので、たんに批評上ではなく文字通り、文明の運命は核戦争を飽したICBMの軌道のなかにおかれてゐる。人間の存続自体が東と西の核による脅威の間の均衡に依存してゐるのだから、われわれは、いま自由のための闘いのなかで理論と実践を統一し、こうして哲学と現実の分裂を廃止し、哲学を「実現すること」つまり自由を現実のものとするこの緊急に耳を傾けねばならない。

あとがき

停滯せるアジア、殺れるアフリカ。永遠にそのような状態がつづくのかとく、古い歴史観はもてた。そしてまた、このアジア・アフリカを、帝国主義が、「覚醒させる」という美名のもとに侵略した。帝国主義列強と競合しはじめた日本帝国主義は、この西欧帝国主義によるアジア侵略にたいする「抵抗」の名において、自らのアジア侵略を美化したのである。

ヘーゲルの「歴史哲学」の叙述の中では「歴史は東洋から」はじまっている。そして、その中では永遠の反復の中に停滯しつつあるアジア。アフリカは固くねむり込んでいる。

アジア・アフリカが帝国主義と植民地主義に対して立ち上るといふことは、世界史が、人間の自らに対する抑圧を脱出する時代に入っていることを示している。逆説的にいへば、帝国主義の侵略によって「覚醒」せられたアジア・アフリカは、帝国主義そのものを「覚醒」させなければならぬ。だが、「アジアの一面」である日本のプロレタリアートは、実にこの二つの課題を負っているのである。いいかえると世界革命の中で、アジア革命の推進とアジアの侵略者日本帝国主義の打倒との二つの課題を負っているのだ。これがわれわれの下書きである。ラーヤ・ドナエフスカヤは、アジア・アフリカ革命の

世界史的意義については、一つはアメリカ黒人運動に与える影響の点で、他方では、先進国プロレタリア革命の任務との関連で、きわめて重視しており、とくにアフリカ諸民族の解放闘争を過少に評価する「左翼」を強く及ぼしている。この点でわれわれは、多くのものをラーヤ「アジア・アフリカ革命」から学ぶものがある。

注目すべきは、汎アフリカ主義に対する批判と、旧植民地国において純粋プロレタリア革命のみを期待する立場への批判であり、とくに後者は、トロンキーへの批判、レーニンの民族問題に対する正しい態度の評価とつながっている。

ラーヤの哲学論文は、「マルクス主義と自由」と同じ問題意識によって追究されている。日本のマルクス主義がふたたびヘーゲルの検討を課題としているとき、日本の「資本論」研究はヘーゲル研究とわたちがたくむすびつけてきた一つのチャレンジとしての意味をもっている。

マルクス主義的人間主義の「直接的」な性格とラーヤのヘーゲル評価「国家資本主義」観に因しては主体的に批判、検討しなければならないが、さしあたっての討論・研究のためにまず、この論文集を、日本の革命的労働者、学生、知識人諸君に送りたい。われわれの運動の中に現に生きている現代変革の精神を具體的理論的に磨き上げていくために。

一九六五年十二月二十九日